

リアリズムとは何か：理念型と思想の間
(佐藤信一先生・田中克志先生退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中本, 義彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007883

リアリズムとは何か — 理念型と思想の間 —

中 本 義 彦

はじめに

国際政治を理解しようとする際に、まず学ぶべきものは何か。この問いに対して、多くの国際政治学者は「リアリズム」だと答えるであろう。リアリズムに賛同するにせよしないにせよ、この考えはきちんと押さえておかなければならない。世界中で最も広く使用されている国際政治学のテキストのひとつであるジョセフ・ナイの『国際紛争』も冒頭で述べているように、「冷戦後ますます顕著になっているリベラル〔国際協調主義者〕やコンストラクティヴィスト〔構成主義者〕のアプローチに取り組む前に、伝統的なリアリスト〔現実主義者〕の理論を叩き込¹まなければならない。こう考えられているのである。

ところが、他の多くの学問分野と同様に、国際政治においても「リアリズム」という言葉ほどわかりにくいものは

ない。その意味と意義を真に理解するためには、まずこのアプローチが生まれた経緯を知らなければならぬし、それを継承した者たちの系譜をたどらなければならない。そして、実際に「リアリスト」と呼ばれてきた人びとのニュアンスに富んだ思想を理解しなければならぬ。つまり、彼らが書いたこと、実践したことを、それなりの長い時間をかけて読み解き、彼らの時代のなかに身を置いて追体験してみようという作業が必要となる。

本稿が問題にしたいのは、そうした「長い道のり」を経ようとせずに「リアリズム」を単純化されたモデルとして理解し、それを「分析のための道具」として使用しようという、昨今の少なからぬテキストや研究に見られる傾向である。なかでも先にあげたハーバード大学のジョセフ・ナイらが抽出し、それ以降、世界中で広く使われている「三つの仮定」をとりあげ、それがもたらしかねない負の影響について論じてみたい。

一九七七年に刊行されたロバート・コヘインとの共著『パワーと相互依存』において、ナイはリアリズムの「理念型」を提示した。そしてさらに、先述のロングセラー『国際紛争』(初版は一九九三年刊、最新版の第九版は二〇一三年刊)において、それを駆使して国際政治をわかりやすく読み解いている。²⁾

これらの著書によれば、リアリズムとは概ね、(一) 国際関係のアクター(主体)は何か、(二) それが追求する目的は何か、(三) それが使用する手段は何か、という三つの基本的な問いに対して次のように答えるアプローチである。すなわち、(一) 国家が唯一の重要な主体である、(二) 安全保障が主要な目的である、(三) 軍事力が主要な手段である、とする考えである。

そしてナイによれば、この概念を学ぶ必要があるのは、それが国際政治の継続と変化を理解するうえで不可欠な「分析のための道具」だからだという。主権国家が国際政治の単位として登場した十七世紀の半ば以来、国際政治は本質

的に変わっていないのか。それとも、大きく変わりつつあるのか。この問題を考える際に、われわれはリアリズムをいわば測定基準として使うことができる。つまり、リアリズムは古くからの伝統的な国際政治のあり方を端的に示したものだから、そこからどの程度現在の世界が離れているかを考えればよい、というわけである。

(二) 国家は依然として国際政治における唯一の重要なアクターなのか。国連を初めとする国家間組織、多国籍企業やNGO（非政府組織）からテロリストのネットワークにいたる脱国家的主体も国家と同じくらい大きな影響を世界に及ぼしているのではないか。(三) 安全保障はいまなお国際政治における主要な目的なのか。経済成長や豊かさの実現も重要な目的になってはいないか。(四) 軍事力はいまも重要な政策手段か。経済力や国際制度の活用なども軍事力に匹敵する主要な手段になってはいないか。

たしかに、こう考えることによって、世界政治の何ほどの程度変わり、変わっていないのかを、かなりの程度明確にすることが可能になる。そして実際それは、約二五〇〇年前のペロポネソス戦争から十九世紀の古典外交時代、二十世紀の両世界大戦と冷戦を経て、二十一世紀のグローバル化にいたる長い歴史を概観している『国際紛争』の著述が証明していると言えるだろう。

しかし、ナイ自身のようにリアリズムと格闘し、そこから理念型を作り上げた論者は別としても、その理念型を最初から与えられた学徒は、どうしても実際以上にリアリズムを単純なものとして理解してしまはいないだろうか。そもそも、このアプローチを構築した当の「リアリスト」たちは、リアリズムを単純化して教える方法に賛意を示したであろうか。

これは難しい問題である。というのも一方で、物事の本質をわかりやすく説明することは大切なことである。また、

リアリストでもあったマックス・ヴェーバーが強調したように、人間の行為を理解しようとする際に重要な物事の特徴を極度まで純粹化して「理念型」を作り、それを分析の道具として使用するのが時に賢明な方法であることは疑いない。

しかし他方で、単純化には誤解の危険がつきまとう。多くの国際政治学者たちは、リアリズムの重要性を強調して、それを理解してもらおうとするあまりに、純粹化によって削ぎ落とされたリアリズムの他の側面に十分な注意を払わなくなってしまうのではないか。リアリズムのエッセンスを提示しようとするあまりに、当のリアリストたちが直面し、苦悩し、むしろ明確で統一した答えを出せなかった諸問題に正面から向き合わなくなっているのではないか。

以上のような問題意識の下に、本稿では、三つの問題を取りあげたい。第一は、そもそもリアリストたちにとって最大の関心は何だったのかという問題である。第二は、「国際政治は権力闘争である」とリアリストたちが主張するとき、彼らは何を意味していたのかという問題である。第三は、「リアリズムは変化よりも継続を強調している」という主張は果たして正鵠を射ているのかという問題である。順に検討してみよう。

一、実践的思惟としてのリアリズムとその苦悩

まずは国際政治から少し離れて、リアリズム（現実主義）という言葉の意味について虚心坦懷に考えてみよう。「リアリズム」とは通常、「現実的なものを最も重視する主義」「主義・理想にこだわらず、現実の事態に即して事を処理す

る主義」だと説明される。そして「現実性」とは「実際に起こりうる、または存在しうる可能性」を意味するとされている。リアリズムの反対はアイディアリズム（理想主義）であろうが、この言葉は「常に理想を標準として考え、行動する主義」を意味していると言つてよからう。

人間は現実と理想の双方のレベルで生きる。かつて『孤独な群衆』の著者として知られる社会心理学者のデイヴィッド・リースマンが述べたように、「現実だけに生きるのは味気ないし、未来だけに生きるのは心もとない」。にもかかわらず、現実から出発して考えるか、理想から考えるかが大きな違いをもたらすことがある。リアリズムという言葉が、われわれの生活の少なからぬ局面で使用されるのは、このためであろう。

国際政治学におけるリアリズムも、こうした日常生活で使われるリアリズムと類似した意味を有している。つまりそれは、自国を取り巻く「現実」を最重要視し、それに即して、つまり「実際に起こりうる可能性」のなかから最善の結果が導きだされるように行動すべきだとする考えだと言つてよからう。もちろんここでも、リアリズムという言葉が使われるようになった背景にはアイディアリズムがある。「常に理想を標準として考え、行動すべきだ」と考えた人びとがおり、それに対して「理想はそうかもしれないが、現実はそのとはいかない」と説いた人びとがいた。そしてそうすることによって、彼らは、国際政治の理論と実践の双方に大きな影響力を及ぼしてきたのである。

a. 目標、目的、手段

それでは、リアリストたちの最大の関心は何だったのか。彼らは何を追求していたのか。ここで重要なのは、かつて政治思想家のハンナ・アーレントが強調した「目標」(goals)と「目的」(ends)の区別であろう。⁴ 目標は、「私たち

が自らの方向付けを行なうため」の指針であり、「それに従ってあらゆる行為が判断されねばならない標準を規定する」。これに対して、「目的^エ終わり^ド」は、「それを作り出した活動力が完結して、初めてリアリティになり始めるもの」である。つまり、「手段の兵器庫を用いて暴力が人間と人間の間の空間に持ち込まれたとき——この時までこの空間でやりとりされてきたのは言論だけであり、それは実体的な手段（＝媒体）を欠いている——初めて政治の目標は目的になる」。

この区分を用いれば、リアリストたちの目標も、他の多くの論者たちと同様に、単なる「現実」の把握ではなく平和であったと言えるであろう。理念型化されたリアリズムからは容易に見えてこないが、リアリストたちも平和を指針に国際政治を考えようとしていた。⁵ もちろん、彼らの言う「平和」の本身は、アイディアリストたちの言うそれとは異なっていたのかもしれない。しかし、少なくとも、それと同じくらい重要なものは、（一）ともかくリアリストたちも平和を目標としていたということ、（二）ただし、それに向かって動き出す前に、出発点たる「現実」を確認し分析する必要性を強調していたということ、⁶（三）そして、「現実」を分析することによって使用可能な手段を吟味し、それに見合った目的を設定しようとしていたということであろう。

もちろん、ここで鍵となるのは、この目標と手段の間の緊張関係の有無である。「リアリスト」と言うと、あるがままの「現実」を諦念とともに受け入れ、場当たり的な損得計算によって選択肢を決める、冷たい機械のようなイメージを抱く向きもあるかもしれないが、それは、ほとんどの場合、間違っている。かつて政治学者の丸山眞男は、リアリストの言う「現実」が「既成事実」や「仕方のない」過去⁷、ひいては「その時々⁷の支配権力が選択する方向」になる危険を鋭く指摘したが、少なくとも本稿で取り上げる代表的なリアリストたちに、そうした傾向は見られない。

誤解されることも多いが、リアリストたちとて何も戦争や闘争を望んでいたわけではないし、諦念とともにそれらをすべて受け入れていたわけでもない。それどころか、彼らは、自分たちが生きる世界の安全性を高めるといふ点ではアイディアリストたちと類似した理想を持っていた。ただし、彼らがアイディアリストたちと異なるのは、「われわれが存在し、さまざまな要因に拘束されている現地点から、平和という目標に少しでもスムーズに近づくために、どのような目的を設定すべきか」という実践的な問題に、大きな関心を寄せていたということであろう。そして、言うまでもなく、その際にリアリストたちが認識する「現実」も、設定する「目的」も、使用する「手段」も、彼ら自身が抱く理想や価値観に、少なからぬ影響を受けていた。彼らが言う「現実」として常に「事実の真理」と完全に重なっていたわけではないし、彼らが考えた手段や目的も常に適切だったというわけではないのである。

ここでは、以上のような点を、リアリズムの始祖とも言えるトゥキユデイスや、現代のリアリズムのパイオニアとみなされているE・H・カーの議論をたどりながら概観してみよう。

b. トウキユデイスの問題意識

トゥキユデイスの著書『歴史』（前四〇四年頃?）は、（第二次）ペロポネソス戦争と呼ばれる二十七年間にわたる、アテネとスパルタという二大都市国家間の大戦争（前四三二年〜四〇四年）を叙述したものである。

ナイの『国際紛争』においては、この著書は、主として、リアリズムの理念型にきわめて近い世界が少なくとも約二五〇〇年も前から存在したということを示す歴史的資料として使用されている。⁸（一）ペロポネソス戦争は、上位に政府を持たない都市国家同士の戦いであった、（二）各国の目的は安全保障であり、（三）主たる手段は軍事力であっ

た、というわけである。

『歴史』という著書自体は、壮大なスケールで展開される物語だが、ナイが使うのは、主に、開戦の部分と、いわゆる「メロス島の対話」の部分である。

開戦の部分については、まず、「戦争を不可避にしたのは、アテネの力の増大と、それがスパルタに引き起こした恐怖であった」というトゥキュデデスのあまりにも有名な文章が紹介される。そして、事件の要約を通して、国際政治における最も重要な要因は力の分布であり、安全を脅かされるのではないかという恐怖がもたらすダイナミズムだというリアリズムの主張がこの著書にはあると解説される。

古代ギリシャの二大国であったアテネとスパルタは、一度戦いを交えた後、三十年の平和を約していた。しかし、生き残りを合理的に追求した結果、二大国は皮肉にも大戦へと突入してしまう。コリントとケルキュラという小国同士が衝突し、その一方のケルキュラから助けを求められたアテネは、応じれば休戦協定を破ることになると知りながらも、その求めにある程度は応じざるをえない。さもないければ、ケルキュラがコリントの手に落ち、コリントの背後にいるスパルタの勢力がアテネの安全を脅かすほど強くなってしまうからである。

もうひとつの事件である「メロス島の対話」については、「強者は持てる力でなしうることをなし、弱者は受け入れるをえないことを受け入れるものだ」というアテネの代表者の発言が引用される。そして、「力は正義なり」という現実に対する冷徹なリアリズム流の認識がここにあると教えられる。

中立を堅持していたメロスの姿勢を変えさせるべく武力で威嚇してきたアテネに対して、メロスの人びとは「自由のために抵抗する」と訴える。しかし、アテネ側は、こうした道義論を全く受けつけず、先述の言葉を臆面もなく言

い放つ。そして間もなく攻撃を開始し、ついにはメロスを壊滅させてしてしまうのである。

ナイが述べるように、ペロポネソス戦争開戦の事例が、いわゆる「安全保障のジレンマ」に対するリアリズムの洞察を示す一例であることは疑いない。国家間に信頼関係が存在しないかぎり、防御的な意図で行われる一方の行動も他方から見れば攻撃的に見えてしまいかねない。つまり、諸国家は合理的な計算のもとに自国の安全を保障しようとして、逆に相手を挑発し、自らの安全を損ねてしまいかねない。この現代にも見られる皮肉な現実の一端を、トゥキュディデスが二五〇〇年前に鋭く見抜いていたことは確かである。また、彼の記す「メロス島の対話」が示唆するように、基本的に力の闘争である国際政治において、道義への訴えがパワーに圧倒されてしまい、大きな限界を課されることも否定できない事実である。

しかし、『歴史』を書いたトゥキュディデスの最大の関心は、果たして、こうした点にあったのであろうか。そもそも彼は、なぜ『歴史』を書かなければならなかったのだろうか。

もとより、トゥキュディデスの『歴史』については、さまざま見解がある。なかには、彼は歴史家ではなく「素人の悲劇作家」にすぎない、という厳しい評価すら存在する。¹⁰ トウキュディデスは、登場する人物の動機や都市国家の特徴を印象的に書いてはいるものの、経済的・地理的状况にほとんど触れておらず、よって戦争の「原因」さえ「科学的に」明示していない。彼がなしたのには、「ピュロスの戦い」（紀元前四二五年）の勝利という幸運に恵まれたアテネが、扇動的なクレオンを指導者を選んでスパルタに傲慢な要求を突きつけ、果てはシチリア島にまで遠征し、敗北という懲罰を受けるという、ギリシャ悲劇のお決まりのパターンを書くことだけだったのだ、というのである。

これに対して、トゥキュディデスを「最も偉大な政治史家」と呼ぶ論者たちがおり、彼を「リアリズムの始祖」と

みなす人たちも、このグループに含まれると言つてよからう。¹¹ 彼らによれば、トゥキュディデスは、ペロポネソス戦争の原因を「安全保障のジレンマ」という政治的要因に着目して分析しているし、歴史の諸事件は「社会」でも「階級」でも「経済」でもない人間の意思にのみ還元できるという真理を知っている。行為者が自らの行動に与えていた意味の分析に彼が力を注いだのはそのためであり、その「理解」を通して彼は人間の活動を語ろうとした、というのである。

トゥキュディデスを「政治史家」とみなす人びとの見るところ、彼は物語のパターンをもつ「悲劇作家」でも不可避的な運命を描く没落史家でもない。その証拠にトゥキュディデスは、「意図せざる結果」や偶然の積み重ねによってアテネの敗北がもたらされたことを示そうとしている。また、「過去の出来事や、これに似たことは人間の通有性に従つて再び将来にも起こるものだ」ということを明確に知ろうとする人」を読者に想定して、アテネの敗北から得られる教訓を提示しようとしている。¹²

アテネのストラテゴス(将軍)の一人だったトゥキュディデスは、心から祖国を愛していた。しかも彼の見るところ、ペロポネソス戦争開戦前のアテネは自由で民主的でダイナミックな海洋国家であり、文明的にも軍事的にも経済的にも古代ギリシャにおいて優位を誇っていた。その祖国が多くの意味で好対照をなす権威主義的な大陸国家のスパルタに敗れつつあった。高度な文明を誇るアテネが古代ギリシャの世界から消滅しようとしていた。この受け入れがたい事実の意味を把握するためにも、トゥキュディデスは『歴史』を書き続けなければならなかったと考えられるのである。

それでは、なぜアテネは敗北したのであろうか。トゥキュディデスの強調点を一言でいうならば、それはやはりア

テネの戦略的ミスであろう。「戦略の本質とはなにか、と訊かれたら、私は躊躇なく『自己のもつ手段の限界に見合った次元に、政策目標の水準を下げる政治的叡智である』と答えたい」と、かつて永井陽之助は喝破したが、この二五〇〇年前のリアリストの先達も、ほぼ同じ点を強調していたと思われる。

それは、叡智の欠如ではなく、喪失の物語だった。田中美知太郎も簡潔に述べているように、「開戦時のアテネの指導者である」ペリクレスの方針通りに行きさへすれば、勝利は間違ひないものだつたのに、その後の人たちが充分な指導力をもたなかつたために、かへつて権力争ひに終始し、人気取り政策によつて外交や戦争遂行にあやまちを犯し、国内分裂の結果、敗戦を招くやうな事になったといふ見方」をトゥキュデデスは提示しようとしている。¹⁴つまり、ペリクレスのアテネにはあつた戦略的叡智を後継者たちはうまく継承することができなかったと彼は考えていたのであり、その欠点を際立たせて歴史を再構成しようとしたのではないかと考えられるのである。その物語を概観してみよう。

アテネにおける「名門貴族の時代」と「弁論術の時代」の狭間に登場したペリクレスは、両条件を満たす「最大にして最後のカリスマ的指導者」だつた。そのペリクレスが開戦時に市民に向かつて力説したこと、それは「彼我の現有勢力、資源を逐一比較」することであり、その冷徹な現実の認識にもとづいた合理的戦略を採用することに他ならなかつた。¹⁵ペリクレスは、アテネがすでに帝国になっている以上それを守るための戦争は止むを得ないこと、そしてアテネの強み（有効な手段）が海の支配にあることを強調したうえで、それに即した慎重かつ大胆な戦略をとる必要性を訴える。

我々は今日にあつても島国都市にできるだけ近い政策を採用し、土地や家屋を顧みず、海防と都市防衛に留意すべきだ。土地や家屋にとらわれて逆上してしまい、数的に優るペロポネソス「スパルタとその同盟諸国」の陸上勢力と鉾を交えるようなことはしてはならない。

そして、この戦略的目的を維持することにアテネの命運がかかっていると説く。

ともかく諸君が戦争中に帝国の版図拡大を企て、自ら危険を招こうとしないかぎり、勝利の見込みを約束する理由には他にも多くある。私が心配するのは外敵の計略より、かえって国内にある我々自身の誤りだ。

と訴えるのである。¹⁶

戦争の一年目にあつては、アテネはペリクレスに導かれ、順風満帆に戦いを進めた。防御的戦略をとり、同盟諸国を「善事を受けるよりも施す」という方針のもとに大切に扱った。国内の民主政治も安定していた。ところが、戦争二年目（前四三〇年）の初夏になると疫病という予期せぬ試練（アテネ市民の約六分の一が病死し、トゥキュデIDES自身も罹患したといわれる）がアテネを襲い、人心が乱れ始める。「忍耐力の弱さ」という民主主義国が防御的戦略をとる際にともなう潜在的弱点のひとつを、疫病という天災に衝かれてしまうのである。次の年の秋に、疫病はペリクレスの命をも奪う。すると、人びとは次々とデマゴグ（扇動政治家）を担ぎ上げるようになり、国全体が慎慮を失っていく。それとともに自由と民主主義にもとづく穏健な海洋帝国というペリクレスの理想も消え失せていくので

ある。

この過程をトゥキュディデスは実に見事に描いている。それは、有名な「ミュティレネ論争」「メロス島の対話」「シチリア遠征」という三つの事件を時系列的に並べてみるだけでも明らかであろう。¹⁷

「ミュティレネ論争」¹⁸は、戦争四年目の前四二八年にアテネの勢力圏だったレスボス島の自由諸都市がアテネに反抗したことに始まる。アテネは艦隊を送り込んでこれを鎮圧して包囲する。その後、島の中心都市のミュティレネの処分をめぐるアテネの民会で激論が交わされるのである。

そこでは二人の政治家が登場する。ひとりには、弁舌巧みにアテネ市民の怒りの感情を煽るクレオンである。彼はまず、アテネがミュティレネの独立を認めるなど「深い配慮」を施していたことを市民に想起させる。そして、勢力圏を維持しようとするならば「自衛の手段」としての厳罰が必要であると訴えて、ミュティレネの成年男子全員を死刑にし、婦女子を奴隷に売るという極刑を主張する。これに対してディオドトスというもうひとりの政治家が反論する。彼は、事件のいきさつについては全く触れず、極刑がアテネにとって「得策ではない」という理由で首謀者のみの処刑を主張するのである。謀反を起こした者を絶望に追いやれば、最後まで抵抗する決意を固めさせることになってしまふかもしれない。そうなれば、「包囲の費用」がかさみ、「廃墟の都市からは貢納金を取り立てられない」という事態が発生してアテネにとって損害になりかねないとい説く。

結局この論争はディオドトスの勝利に終わる。幸いにも、「市民の中では最も乱暴で、しかも当時の大衆派の中では最も説得力のある男」とトゥキュディデスが警戒するクレオンの意見は通らなかった。しかしそれは、どちらに転んでもおかしくないほどの僅差だったのであり、薄氷を踏むような勝利に過ぎなかったのである。

「メロス島の対話」が行なわれるのは、この「ミュティレネ論争」から十二年を経た戦争十六年目の前四一六年である。¹⁹「ミュティレネ論争」から二年後の「ピュロスの戦い」においてアテネは全くの幸運に恵まれて勝利し、これを機に攻勢をかけていくが、戦況は拮抗する。そして、その途中で約三年間の休戦はあるものの戦争は長期化する。そうしたなかで、この事件が起こるのである。

メロスの人びとは元来アテネのライバル都市であるスパルタからの移住民であり、他の島国都市のようにアテネの勢力圏には入らずに中立を堅持していた。この態度をアテネが変えさせようとして出兵し、攻撃する前にまず交渉を試みるという話である。メロスの代表団は、自分たちがもともとアテネの勢力圏にはない「無関係の都市」の住民であり「謀反を起こして鎮圧された多くの他の都市」とは違々と、そして、「名誉」ある態度をとる自分たちを罰すれば他の中立諸都市がアテネを敵視するようになると訴える。だが、アテネの使節団は、にべもなくこれを拒絶する。そして海の世界では自分たちが覇者であることを強調したうえで、むしろ「海上勢力でありながら強者の圧迫に屈しない者」こそが自分たちにとっての脅威だと主張するのである。

ここで先述した有名な言葉が投げつけられる。「弱肉強食が世の習いなのだ」。こう喝破したアテネは、包囲攻撃を開始し、メロスは無条件降伏を強いられる。そして驚くべきことに、アテネはメロスの成年男子を全員殺害し、婦女子を奴隷に売り、アテネからの移民をメロス島に送って、そこに住ませたというのである。

この二つの事件によってトゥキュディデスが描きだそうとしているのは、アテネにおける政治的雰囲気とアテネ人の対外関係へのアプローチの変化であろう。ペリクレスの死の翌年には、すでにペリクレス的な思考は力を失っている。「第一人者たらんとして民衆に媚びる」クレオンが天災による人心の乱れにつけ込み、人びとの不安を源泉に噴出

する見境のないナシヨナリズムを利用して人気を博す。アテネ市民は最終的に何とかこれを退けるが、その原動力になったのは、もはや「海洋帝国としてのアテネ」という現実と「自由な文明の繁栄」という理想を見据えるペリクレス的な戦略的思考ではない。狭量な損得勘定に多くを訴えるデイオドトス的なシニズムになってしまっていたのである。

目標とのつながりを失ったシニズムは、本質的に強い力をもちえない。トゥキュディデスが挿入している「メロス島の対話」のエピソードが示唆する真実のひとつは、そのことであろう。「ミュティレネ論争」の際にナシヨナリズムとシニズムに二極分化していたアテネの世論は、「ピュロスの戦い」という幸運に恵まれてしまったがゆえにナシヨナリズムの方へ傾き始める。そして、戦争の長期化という苦しい現実から逃避するかのように情熱的で暴力的なナシヨナリズムへと馳せ参じてしまう。われわれは「メロス島の対話」の結末に関するトゥキュディデスの叙述から、こうした雰囲気の変化をさほど困難なく見て取ることができるのである。

戦争十七年目、「メロス島の対話」の翌年にアテネはどう見ても無謀なシチリア遠征を決議してしまうが、そのときのアテネはそうした気分にあつたのであろう。²⁰クレオンにもまさる攻勢論者のアルキビアデスが「時の人」となり、壮大な遠征による事態の打開というシナリオを提示する。これは夢物語以外の何物でもないのだが、アテネの市民は熱に浮かされたようにこれを支持し、ついに形勢は大きく傾き始める。前四一三年にアテネは不運も重なってシチリアの戦いに敗れ、その二年後にアテネの民主制は崩壊。そしてその七年後の前四〇四年に、ついにペロポネソス戦争敗北という悲劇的な「意図せざる結果」に直面することになるのである。

開戦時にペリクレスが冷静に見た「現実」（利用可能な手段）と「予測しうる結果」、そしてそれにもとづいて彼が

構築した防御的戦略（目的）を、アテネ人は尊重しつづけることができなかった。彼らは、そうする強さをもちえなかったのである。不運と幸運に翻弄され、「現実」と「予測しうる結果」を見失ったアテネの人びとは、負けるはずのない戦争に負け、自由で豊かな文明を滅亡させてしまった。トゥキュデデスは深い悲しみのなかで、後世のわれわれに、こう訴えかけているように思われるのである。

c. E・H・カーの処方箋

E・H・カーが『危機の二十年』²¹で描き出しているのも、人類が経験せざるをえなかった壮大な「意図せざる結果」である。好戦的な態度をとる国を前にして、なぜわざわざ争いを望むのか、なぜ平和の価値がわからないのか理解に苦しむ、といった話はよくあるものだが、カーが体験したのは、これとは逆の現実だった。つまり、彼が生きた時代の人びとの多くは平和を熱望した。しかし、それにもかかわらず、大戦争の危機を迎えてしまったという意外な歴史の結末だったのである。

「危機の二十年」というタイトルからもわかるように、カーがこの著作で分析の対象としたのは、一九一九年から一九三九年の二十年間、つまり第一次世界大戦を正式に終わらせたヴェルサイユ講和条約が締結された年から第二次世界大戦が開始される直前までの戦間期と呼ばれる時代である。この時期の大半をカーはイギリスの外交官として過ごした。ケンブリッジ大学を首席で卒業し、大学に残って古典の研究へと進むはずだった彼だが、二十二歳のときに突然始まった第一次世界大戦が激しさを増し、外務省に召集されていたのである。そこでたまたまロシアへ物資を届ける仕事を担当しているときに、ロシア革命が勃発。これを機にカーはロシアへの関心を高め、一九一九年には外務

省きつてのロシア通になっていた。そのためパリ講和会議にもイギリス政府代表団の北東ヨーロッパ担当のアシスタントとして参加し、奇しくもヴェルサイユ講和条約締結の日（二十七日）の誕生日を迎えている。一九三六年（四十四才のとき）に外務省を退職し、第一次世界大戦後に創設された国際関係論講座の教授としてウェールズ大学に赴任。その翌年に執筆を開始し、一九三九年の第二次世界大戦勃発直前に書き上げたのが『危機の二十年』だったのである。²²

カーの言葉を待つまでもなく、第一次世界大戦は「計りしれない大惨事」だった。それは（彼自身を含む）多くの人びとの静かで安定した生活を一変させただけではない。実際、一九〇〇万人の戦死者と二二〇〇万人の負傷者という開戦時には予想もしなかった未曾有の犠牲者を出した。十九世紀に起こった産業革命と民主革命で動員力を飛躍的に高めていた諸国家は国民と工場を総動員して戦い、少し前に開発されていた機関銃と重砲が、それまでの戦争の数百倍の速度で人命を奪っていったのである。この戦争を経験した人びとは、「二度と同じ悲劇を繰り返すまい」と心から願った。その固い決意のもとにヴェルサイユ講和条約を結び、国際連盟を創設し、不戦条約まで締結した。しかし、そのたった二十年後には第二次世界大戦勃発の危機を迎えることになってしまったのである。

なぜであろうか。こう自問して「来るべき平和の創造者たち」に歴史の教訓を示そうとしたのが、カーであった。彼は、自分たちが直面している危機の原因を「ほんの一握りの人たちの野望と尊大のせいにする」愚かさを指摘したうえで、その「直接的・個人的要因よりも、むしろその根源的かつ意味深長な原因」を分析しようとした。²³ もちろん彼とて、個々の政治家や政策に対する批判的な視点をもち合せていなかったわけではない。しかし、彼は、その批判をもう一步深めた、国際関係の実践哲学の書を著わそうとしたのである。

まずは、カーが見た「直接的・個人的要因」を見てみよう。ここで際立っているのは、何と言っても自身がその締

結を眼前で見たヴェルサイユ講和条約に対する彼の批判的な態度である。第一に、カーはヴェルサイユ条約が完全に間違った方法でドイツ問題を処理したと考えていた。戦争の再発を恐れるあまり、戦勝国はドイツを厳罰に処した。一割以上もの領土を奪い、陸軍を制限し、空軍の保持は禁止したうえに「戦争責任条項」まで押しつけた。これはカーの見るところ、ドイツを「狭量な屈辱にさらし」、国全体に「完膚なきまでに道徳的有罪を宣告」したうえで、これを国際政治の埒外に置こうとする全く非合理的なやり方に他ならなかった。²⁴

第二に、カーはパリ講和会議で国際政治の中心舞台に躍り出たウッドロー・ウィルソン米大統領をきわめて批判的に見ていた。カーにとってウィルソン大統領が道徳的なレトリックを駆使して提唱する「集団安全保障」は、影響力拡大というアメリカの野望の隠れ蓑のようなものであった。また、ウィルソン大統領がスローガンにした「民族自決権」の適用については、強い疑念を抱いていた。外交官として東ヨーロッパの新しい独立諸国家の問題に従事していたカーは、さまざまな民族が混在するこの地域に国境線を引くことがいかに難しいか、そして、たとえ民族の客観的境界を見定めることができたとしても、当事者たちをその境界線で満足させることがいかに困難か、ということをも身をもって理解していたのである。²⁵

以上のような直接的・個人的原因の奥底にカーが見出したものは、人びとの「外交政策に対する基本的な誤解」であった。もちろんカーとして、他の多くの人びとと同様に、次の大戦を回避したいと願っていた。彼の目標も平和であった。しかし「平和」「民族自決」「集団安全保障」といった抽象的な原則に依拠し、それらを普遍的に適用しようとするだけでは危機を克服することはできないと考えていた。カーの見るところ、第一次世界大戦後に提唱された「平和」は戦勝国にとって都合のよい平和であり、「民族自決」も「集団安全保障」も同様である。つまり、こうした諸原則は、

自分たちにとって有利な現状の維持を欲する戦勝国が、それを正当化するために利用した道具に過ぎない。そして、これがかなりの程度公平無私に見えたことこそが、危機の「根源的原因」なのである。

カーは、こうした人びとの「外交政策に対する基本的な誤解」の源泉を探り、それをヨーロッパで十九世紀に広がった「ベンサム流合理主義」に見出す。「最大多数の最大幸福」のスローガンで知られるこの主張によれば、善の探求は幸福の追求であり、人びとが正しく理性を働かせることができるかどうかの問題である。そして、そうするために必要なのは知識の普及である。思想としては、すでに十九世紀末には重大な疑問を投げかけられていたこの考え方が、皮肉にも戦間期において国際政治の分野に姿を現したのだとカーは指摘する。こうして、人びとの理性の集合体である国際世論に依拠すれば平和がもたらされるはずだという信念、すべての国が「平和」に同一の利益をもち、その利益は自然に調和するはずだという信念が生まれた。そして、この「ユートピアニズム」が人びとの判断を誤らせることになったとカーは結論するのである。²⁶

われわれは、抽象的な諸原則の背後に潜む「現実」を透視し、その基盤の上にルール作りを進めていかなければならない。こうカーは訴えた。そして、カーにとって同時代における最重要の国際的現実とは、目の前で進行していた力の移行、つまり母国であり過去一世紀にわたって支配的な影響力を行使してきたイギリスの相対的衰退とドイツの台頭であった。ドイツはすでに一八九〇年代には重工業でイギリスを追い抜き、一九一三年には世界の工業生産の一五パーセントを占めるようになっていた（イギリスは一〇パーセント）。その後、第一次世界大戦とその敗北によって大きなダメージを受けたものの、急速に国力を回復しつつあった。そしてその当然の帰結として、第一次世界大戦の戦勝国が構築し、維持しようとしてきた現状を打破したいと望んでいたのである。

カーは、この「現実」を直視し、それに即したアプローチをとるべきだと主張する。ドイツの台頭は自然かつ必然のものである。そしてそれゆえに、最も留意すべきは、この現実を受け入れ、いかに大戦争を回避しながら現状を平和的に変革していくかということに他ならない。つまり、ドイツを懲罰したり、意図的に弱体化させようとしたりして、そのさらなる不満の増大を招くよりも、ドイツの力を認め、この大国を国際社会のなかにうまく組み込んでいかねばならない。そのためには、まず「持てる国」が「持たざる国」に譲歩することによって、満足の均衡を作り出さなければならぬ。これが、戦間期のカーが考えた「予測しうる結果」にもとづく最良の処方箋だったのである。²⁷

ジョセフ・ナイが構築したリアリズムの理念型からは容易に読み取ることができないが、元来リアリストは、平和の実現を目標としていた。そして、彼らの最大の関心は、それに近づくための「現実的」かつ具体的な目的の設定にあったと言つてよからう。彼らは「現実」を最重要視し、そこから有効かつ利用可能な手段を探った。そしてそれに見合った目的を考えた。この点に触れずに、リアリズムを語ることは、その核心を無視することに等しいのである。

d. 「現実」がはらむ問題

以上のように、「分析の道具」としてよりもむしろ実践的思惟としてリアリズムを考えると、それが抱える別の重要な弱点も見えてこよう。先に見たように、リアリストたちとして、目標をもっていないわけではない。リアリズムが「現実」を「可能性の束」として見ないで、「既成事実」や「仕方のない過去」や「その時々々の支配権力が選択する方向」に見出す危険をはらんでいるという指摘は正鵠を射ているが、少なくとも、このアプローチの創始者であるトゥキディデスやカーは、それを巧みに回避している。

ただし、問題は、この陷穽を避けたからといって、現実を完全に把握できるわけではないということであろう。現実を理解すること、[「可能性の束」]の中身を正確に把握するということは、それほど生やさしいものではない。リアリストたちは、現実を理解することを最大の義務とみなし、現実的な最善の処方箋を書こうとした。にもかかわらず、それに常に成功したわけではないし、彼ら自身、自分たちの処方箋に常に確信をもっていたわけではない。

まず、トゥキュディデスの『歴史』を見てみよう。彼がペリクレスを称賛していることは疑いないが、他方でそれは手放しのものではない。後から考えれば、ペリクレスについてさえ彼が「現実的なもの」を本当に正確に把握していたのかという疑問が生じうるのであり、それをトゥキュディデスはほめかしている。

なるほどクレオンの提唱する政策はとても現実的とは言えなかったし、アテネの人びとが時の流れとともに現実感覚を失っていったのも事実であろう。これらの点を示そうとするトゥキュディデスの叙述は冴えわたっている。また、海防と都市防衛に徹する防衛的戦略が海洋帝国アテネにとって合理的であるというペリクレスの主張にも説得力がある。しかし、そもそもスパルタと戦争を始めたこと自体は、賢明だったのだろうか。戦争の不可避性を説いたペリクレスは、果たして「予測しうる結果」を正確に考量していたのだろうか。われわれは、疫病という天災を想定外の不運とみなして、それによって自らも命を失ったペリクレスを免罪すべきなのか。

これは難しい問題である。実際、トゥキュディデス自身も完全に割り切って考えてはいなかったように思われ、ペリクレスを称賛する一方で、戦争開始前にスパルタでの討議に送られたアテネの代表に次のように語らせている。

戦いに踏み切る前に、その予測がいかにつかにくいかよく見きわめてほしい。つまり、長期戦では偶然が大局を

支配しがちになり、その偶然の前には彼我の別はないのだから、我々は先行きも不明のままに勝負を賭けることになるからだ。²⁸

カーの処方箋についても、それが最善だったと断言できるわけではなからう。なるほどカーが批判するように、第一次世界大戦の戦後処理には問題が多い。ドイツに対する懲罰が厳しすぎたことは明らかだし、第一次世界大戦があまりにも悲惨であったがゆえにそれを経験した人びとが「ユートピアニズム」の陥穽におちいったのだというカーの議論には説得力がある。「平和」や「集団安全保障」や「民族自決」といった普遍的原則に覆われた外観の背後に「持てる国」と「持たざる国」の存在という現実があり、それが実際の国力の分布の変化を反映していないことが危機の原因のひとつであるという観察はきわめて鋭い。しかし、カーが主張したように、イギリスをはじめとする「持てる国」は、第二次世界大戦直前の危機のなかで「持たざる国」ドイツに譲歩すべきだったのだろうか。そもそも当時のドイツを満足させることなど可能だったのだろうか。カーは、覇権国の興亡という現実を重視したが、ドイツを統治していたのがヒトラーの率いるナチスだったという現実も、少なくともそれと同じくらい重要だったのではないか。これらもまた難しい問題であろう。その後のヒトラーの止まることのない侵略を知る後世のわれわれから見れば簡単に思えてしまうかもしれないが、当時の状況に身を置いて考えれば事情は違つてこよう。実際、ヒトラーへの譲歩を説いたイギリスの知識人はカー以外にも決して少なくなかった。ヒトラーの意図を知ることとは、少なくともわれわれがイラクのサダム・フセイン大統領や北朝鮮の金正日総書記の意図が明確にわからなかったのと同程度に困難な作業だったのではなからうか。

実際、カーも判断に苦しんだようであり、その形跡を見つけることはさほど困難ではない。『危機の二十年』において、カーはドイツにチエコスロバキアのズデーテン地方を割譲することを決定した一九三八年のミュンヘン会談を「近年において平和的変革による主要な国際問題の解決に最も近いもの」と記している。現在においてはヒトラーを増長させ侵略行為に向かわせた「宥和政策」として悪名高いイニシャチブを高く評価した。しかし他方で、同じ段落のなかで次のようにも述べているのである。

しかしながら、この変革の他の諸側面には、それほど元気づけられたものではなかった。ヒトラー総統自身は、武力の要素を病的に強調し、平和的交渉の要素を最小化したがつているように思われた——これは、ヴェルサイユで連合国が用いた方法を考慮すれば心理的には理解可能だが、にもかかわらず、平和的変革の手続きを確立するという点では有害な特徴だった。²⁹

そして第二次世界大戦が終わった翌年に『危機の二十年』の再版が決定された際、カーはミュンヘン会談を含む対独宥和政策に関する記述のいくつかを「時間の経過とともにこれまでとは異なる背景のなかに置かれて意味を失った二、三の箇所」として削除したのである。³⁰

問題点は明らかであろう。リアリストたちは、われわれが時折抱いてしまう理想主義的幻想を指摘するという点においては、きわめて強力な議論を展開しうる。そうした典型的な過ちを避けよと説く彼らの声は明快で自信に満ちている。しかし他方で、彼らが最重要視する「現実」も、考量する「予測しうる結果」も、実のところ、彼らにとって

さえ決して自明ではない。そしてそれゆえに、リアリズムを採用したからといって、全く同じ現実が見えるわけでも、全く同じ判断に到達するわけでもない。人間の行動を理解し判断しようとする他の多くの理論と同様に、国際政治におけるリアリズムも最も基本的な部分に最も大きな問題を抱えたアプローチなのである。

もちろん、リアリストたちとて、この問題を知らないわけではない。彼らは、「現実」を把握する際にも「予測する結果」を考量する際にも、実のところ、多くを自身の直観やセンス（感覚）に頼っていたし、その根拠を説明しようとする作業に限界がつきまとうことを熟知していた。しかし、留意すべきは、それにもかかわらず、彼らがこのアプローチを大切にし、これらの基本的な難問に取り組み、悩み、それについて議論をつづけてきたということであろう。「現実」を把握するために、彼らは、どのような知的格闘に従事してきたのだろうか。その骨子を、あらためて概観してみよう。

（注）

¹ Joseph S. Nye, Jr., *Understanding International Conflicts: An Introduction to Theory and History*, Sixth Edition (New York: Longman, 2007), p. xiii. 邦訳 田中明彦・村田晃嗣訳『国際紛争——理論と歴史』〔原書第6版〕（有斐閣、二〇〇七年）、vページ。

² Robert O. Keohane and Joseph S. Nye, *Power and Interdependence*, Third Edition (New York: Longman, 2001), Chapter 2. 邦訳 滝田賢治訳『パワーと相互依存』（ネルヴァ書房、二〇一二年）第二章、及び Joseph S. Nye, Jr. and David A. Welch, *Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History*, Ninth Edition (New York: Pearson, 2013), pp. 5-7, 11-16, 62-69, 273-275. 邦訳 田中明彦・村田晃嗣訳『国際紛争——理論と歴史』〔原書第9版〕（有斐閣、二〇一三年）、五〇九、一三〇、一九七、二七〇、三二九ページ、参照。

³ よく知られているように、国際政治におけるリアリズムのアプローチは、二十世紀の半ば頃から約半世紀にわたって健筆をふるった「リアリスト」と呼ばれた人びとが構築したものである。代表的な人物としては、イギリスの外交官出身の歴史家 E・H・カー（一八九二～一九八二）、ナチス・ドイツからアメリカに亡命した政治学者のハンス・モーゲンソー（一九〇四～八〇）、アメリカの外交官で歴史家でもあったジョージ・ケナン（一九〇四～二〇〇五）、フランスの思想家でサルトルの論敵としても知られたレイモン・アロン（一九〇五～八三）などがあげられる。このアプローチの起源は、古代ギリシャの歴史家のトゥキディデス（紀元前四六〇頃～三九五）から『君主論』で知られるマキャヴェリ（一四六九～一五二七）、「レヴァイアサン」の著者で（トゥキディデスの『歴史』の英訳者でもある）思想家のホッブズ（一五八八～一六七九）、ドイツの社会学者で『社会科学の父』とも言われるマックス・ヴェーバー（一八六四～一九二〇）などにさかのぼると言われており、現代ではアメリカの国務長官も務めた政治学者のヘンリー・キッシンジャー（一九二三～）、日本では永井陽之助（一九二四～二〇〇八）や高坂正堯（一九三四～九六）がその衣鉢を継いだ論者として知られている。こうした人びとは、『古典的リアリスト』と呼ばれることもあり、後に登場した「ネオリアリスト」や「ネオクラシカル・リアリスト」とは、かなり違うアプローチを採用している。だが、この点については、別の機会に論じることとする。

⁴ この点については Hannah Arendt, "Introduction into Politics," in Jerome Kohn, ed., *The Promise of Politics* (New York: Schocken Books, 2005), pp. 193-194. 邦訳、高橋勇夫訳『政治の約束』（筑摩書房、二〇〇八年）、二二五ページ、参照。

⁵ たとえば、高坂正堯は次のように記している。「問題は、いかにわれわれが軍備なき絶対平和を欲しようとも、そこにすぐに到達することはできないということである。…重要なことは、この権力政治的な平和から、より安定し日本の価値がより生かされるような平和に、いかにスムーズに移行していくかということなのである。…重要なことは目的と手段の間の相関関係、すなわち、手段が目的によって規定されるだけでなく、目的もまた手段によって規定されるということなのである。…たしかに、平和というような絶対的目的は手段とは切り離して設定されうるであろう。しかし、この絶対的目的を達成するにいたる個々の具体的目標——たとえば中立——は、とりうる手段との相互関連において決定されるべきものである。手段と目的との間の生き生きとした会話の欠如こそ、理想主義者の最大の欠陥ではないだろうか。」高坂「現実主義者の平和論」、『増補 海洋国家日本の構想』（中央公論社、一九六九年）、所収、一〇～一一ページ。高坂の言う「絶対的目的」をアーレントは「目標」と、「個々の具体的目標」を「目的」と呼んでいると考えて差し支えなからう。

⁶ かつてヘドリー・ブルは、リアリスト流に次のように述べたことがある。「ときに、スコットランドのどこかで道に迷い、農夫に、ど

ちらがエディンバラに通じる道なのかをたずねた男の話が語られることがある。『そうだね、旦那』農夫が答えた。『私なら、ここからは出発しないわー』主権国家システムが、世界秩序追求のための最良の出発点とはならないという理論は、どこかこの話に似たところがある。[Hedley Bull, *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Second Edition (New York: Columbia University Press, 1995), p. 285. 邦訳、白杵英一訳『国際社会論——アナキカル・ソサイエティ』(岩波書店) 三五五ページ。]

⁷ 丸山眞男『「現実」主義の陥穽』、杉田敦編『丸山眞男セレクション』(平凡社ライブラリー、二〇一〇年)、所収、二四七、二五〇ページ。

⁸ Nye and Welch, *op. cit.*, pp. 16-34. 邦訳、前掲書、二〇一四四ページ、参照。

⁹ 以下の点につづいて、拙論“Thucydides as an Historian”『歴史と未来』第二五号(一九九九年)、一四六―一三三ページ、及び、「(書評) トゥッキュディデス」藤縄謙三訳『歴史』1、京都大学学術出版会、二〇〇〇年、『外交フォーラム』二〇〇〇年一月号、九六ページも参照。

¹⁰ Francis M. Cornford, *Thucydides Myshistoricus* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965), Chapter I and Part II. 邦訳、大沼忠弘・左近司祥子訳『トゥッキュディデス——神話の歴史家』(みすず書房、一九七〇年)、第一章、及び、第二部、参照。

¹¹ 同、Leopold von Ranke, *Universal History: The Oldest Historical Group of Nations and the Greeks* (New York: Harper and Brothers, 1886); Werner Jaeger, “Thucydides: Political Philosophy,” in *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, Volume I (New York: Oxford University Press, 1939); John H. Finley, Jr., *Thucydides* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1942); Raymond Aron, “Thucydides and the Historical Narrative,” in *Politics and History* (New Brunswick: Transaction Books, 1984); Hajo Holborn, “Introducing Thucydides,” in *History and the Humanities* (New York: Doubleday, 1972); Leo Strauss, “Thucydides: The Meaning of Political History,” in *The Rebirth of Classical Political Rationalism: An Introduction to the Thought of Leo Strauss* (Chicago: The University of Chicago Press, 1989). 邦訳、石崎嘉彦監訳『古典的政治的合理主義の再生——レオ・シュトラウス思想入門』(ナカニシヤ出版、一九九六年)、所収などを参照。なお、土山實男『リアリズムの再構築は可能か——トゥッキュディデスと現代国際政治学』『国際政治』一二四号(二〇〇〇年)、四五―六三ページも参照。

¹² Thucydides, *History of the Peloponnesian War* (Harmondsworth: Penguin Books, 1972), p. 48. 邦訳、小西晴雄訳『トゥッキュディデス』(筑摩書房、一九七一年)、一二ページ。

13 永井陽之助『現代と戦略』（文藝春秋、一九八五年）、三二八ページ。

14 田中美知太郎「ツキユディデスの場合」（筑摩書房、一九七〇年）、五一ページ。粕谷一希「名著探訪『ツキユディデスの場合』（田中美知太郎著）」、『環』三三三号（二〇〇八年）も参照。なお、トウキユディデス自身も次のように語っている。「ペリクレースは開戦後二年六ヶ月にして世を去った。だが彼の戦争に対する先見の明は、その死後にいたってますます高く評価されるようになった。なぜなら、彼の持論が、海軍力の養成に努めるかたわら、持久政策を採用して、戦いによる版図拡張を避けて国家の安全を旨とすればこの戦争は戦い抜けるとしていたからである。しかし人々は全く逆に、成功しても個人の物欲や名誉欲を満足させるにとどまり、失敗すれば国家の戦力を著しく低下させる政策を採用した。しかも、彼らはこれらを戦争には無関係であるとして、個人の名声と私利を追求し、自らの上にもまた同盟諸都市にも悪政を施した。」*Thucydides, op. cit.*, p. 163. 邦訳、前掲書、七五ページ。

15 *Thucydides, op. cit.*, pp. 119-120. 邦訳、前掲書、五一ページ。なお、この点については、澤田典子『アテネ民主政——命をかけた八人の政治家』（講談社、二〇一〇年）、一〇八―一二二ページも参照。

16 *Thucydides, op. cit.*, p. 122. 邦訳、前掲書、五二―五三ページ。

17 上の点は、前掲 John Finley, *Thucydides* に多くを負っている。

18 「ミューティレネ論争」については、*Thucydides, op. cit.*, pp. 212-223. 邦訳、前掲書、一〇一―一〇七ページ、参照。

19 「メロス島の対話」については、*Thucydides, op. cit.*, pp. 400-408. 邦訳、前掲書、二〇一―二〇五ページ、参照。

20 「シチリア遠征」については、*Thucydides, op. cit.*, pp. 409-537. 邦訳、前掲書、二〇六―二七七ページ、参照。

21 E. H. Carr, *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, Second Edition (London: Macmillan, 1946). 邦訳、原彬久訳『危機の二十年——理想と現実』（岩波文庫、二〇一一年）。

22 以上については、Jonathan Haslam, *The Vices of Integrity: E. H. Carr, 1892-1982* (New York: Verso, 1999), Chapters 1-3. 邦訳、角田史幸・川口良・中島理晴訳『誠実という悪徳——E・H・カー「一九八二」（現代思潮新社、二〇〇七年）』第一―三章、参照。なお、同書の書評として、拙論『冷徹さ』の陥穽『環』三四号（二〇〇八年）、三〇四―三〇九ページ、参照。

23 Carr, *op. cit.*, ix. 邦訳、前掲書、一三―一四ページ、参照。

24 Haslam, *op. cit.*, pp. 33-34. 邦訳、前掲書、五五―五六ページ、参照。

²⁵ *Ibid.*, pp. 25-29. 邦訳、同上書、四五～五〇ページ、参照。

²⁶ 以上のカーのユートピアニズム批判については、Car, *op. cit.*, Chapters 3-4. 邦訳、前掲書、第三～四章、参照。

²⁷ 以上のカーの「平和的変革」論については、*Ibid.*, Chapter 13. 邦訳、同上書、第十三章、参照。

²⁸ Thucydides, *op. cit.*, pp. 81-82. 邦訳、前掲書、三〇～三二頁。

²⁹ Car, *The Twenty Years' Crisis* (London: Macmillan, 1939), p. 282. なお、カーの宥和政策支持については、Hans J. Morgenthau, "The Surrender to the Immanence of Power: E. H. Carr," in *Politics in the Twentieth Century*, Vol. III: *Restoration of American Politics* (Chicago: The University of Chicago Press, 1962), pp. 36-43; Hedley Bull, "The Twenty Years' Crisis Thirty Years On," in Kai Alderson and Andrew Hurrell, eds., *Hedley Bull on International Society* (London: Macmillan, 2000), pp. 125-138; Michael Joseph Smith, *Realist Thought from Weber to Kissinger* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1986), Chapter 4. 邦訳、押村高他訳『現実主義の国際政治思想——M・ウェーバーからH・キッシンジャーまで』(垣内出版、一九九七年)、第四章なども参照。

³⁰ Car, *op. cit.*, p. vii. 邦訳、前掲書、一〇～一一頁。

二 エッセンスとしての権力闘争

「現実」を尊重すべきだというとき、大半のリアリストは、そのエッセンスを理解することを主張している。いかに懸命に努力しても、現実のすべてを把握することは不可能である。目の前にあるすべてのデータの写真をとるようなことはできないし、たとえできたとしても、その画像の何が問題かを判断できなければ意味はない。こうしてリアリストたちは、国際政治の「写真」を撮ろうとするよりも、そのエッセンスを強調する「絵」のようなものを描き出すとするのである。

よく知られているように、そうしたエッセンスのなかでリアリストたちが重視してきたのは権力である。国家と国家の関係において、力は中心的な役割を演じてきた。国際政治は権力闘争である。ナイの理念型においては、リアリズムのこの主張が当然の前提として背後に退いている感があるが、やはりこれはリアリズムを理解するうえで第一に押さえないといけない命題であろう。世界国家のない無政府状態に置かれた諸国家は、軍事力を手段にして安全保障を追求する。その通りなのだが、その無政府状態がどのような状態なのか、軍事力によるどのような手段に依拠する（べきな）のか。こうした点に関するリアリストたちの主張を押さえないければ、リアリズムを理解しているとはいえないであろう。

リアリストたちが権力闘争を国際政治のエッセンスとして提示するとき、そこには四つの主張があると思われる。³¹すなわち、（一）権力闘争は常態である、（二）そうであるがゆえに、それを除去しようとすることは誤りである、（三）とはいえ、権力闘争は、常に生か死の闘争になるわけではない、（四）そして、そうであるがゆえに、われわれは権力闘争を緩和することができし、また主として勢力均衡に依拠しながら、そうしていかなければならない、という主張である。順に見てみよう。

a. 権力闘争は常態である

国際政治において権力闘争は常態であり、これをまず認めることが重要だとリアリストたちは説く。なぜ常態になるのだろうか。その理由を確認しておこう。

ひとつは、哲学的な理由である。リアリストたちは、国際政治をあくまでも人間の事象としてとらえた。そしてそ

れゆえに、そこで権力闘争を除去することはきわめて難しいと考えた。この点について、リアリストたちは、前章で見たトゥキュディデスをはじめとする多くの思想家から影響を受けてきた。ここでは、とりわけ論理的に完成度の高い二人の思想家の人間観を紹介しておこう。

ひとり、十七世紀のイギリスの思想家でトゥキュディデスの著書の英訳者でもあったトーマス・ホッブズ(一五八八―一六七九)である。³² 彼は人間と動物の違いに着目することによって、人間の本性を興味深く描き出している。つまり、人間は自己保存の本能をもつ点では動物と同じだが、動物にはない構想力をもっている、というのである。人間は動物とは異なり、現在のことだけでなく、過去のこととも未来のこととも考える。現在直面している出来事の「順序、帰結、依存の観察と記憶」を頼りにして、その原因を探ろうとするし、さらにそこで得た因果関係の知識を活用して将来のことを予見しようとする。³³

かくして、ホッブズによれば、人間の意欲の対象は、「一度だけの、そして一瞬の享受ではなくて、かれの未来の意欲の道を永遠に確保すること」になる。³⁴ 多くの動物は空腹であるときにだけ獲物に興味を示すが、たいいていの人間は空腹でなくても食糧を確保しようとする。いまが安全でも、その安全が将来も保持されるかどうかを心配して、いま以上の力を獲得しようとする。

こうして人間は、「つぎからつぎへと力をもとめ、死においてのみ消滅する、永久の、やすむことのない意欲」に突き動かされるのだとホッブズはいう。人間は「満足した生活を獲得するだけでなく、さらにそれを確保」しようとする。つまり、利得を求め、安全を求め、栄光を求めようとするのである。³⁵

こうして出現するのが、よく知られている「万人の万人に対する闘争」である。人間をすべて威圧しておく「共通

の権力」が存在しない自然な状態が存在する場合（つまり、ホッブズが怪物レヴァイアサンに喩えた人工物たる国家が存在しない場合）、「万人の万人に対する闘争」が展開される。もちろんそこでは、常に戦闘が行なわれるとはかぎらない。しかし、そうであるか否かにかかわらず、「その反対にむかう何の保証もないときの全体おける、闘争へのあきらかな志向」が前面に立ち現れ、「戦闘によってあらそおうという意志が十分に知られている一連の時間」が訪れる。³⁶こうした論理が、国家が確立される以前の「自然状態」に置かれた個人間だけでなく、同様に「共通の権力」（つまり、世界政府）が存在しない国家間の関係にも基本的に投影される。こうホッブズは説くのである。

ここで注目すべきもうひとりの思想家は、ホッブズより百年以上後の十八世紀にフランスで活躍したジャン・ジャック・ルソー（一七一二—一七七八）であろう。ルソーは、ホッブズを意識し、彼とはかなり異なる、しかしこれまた興味深い人間観を提示した。人間の本性をホッブズのほとんど対極といつてもよいところに求めたにもかかわらず、結論としてはホッブズと同様に、人間が人間であるがゆえに闘争に陥る姿を描き出した。そして国家間にも、ホッブズが想像したものと類似した「戦争状態」が出現すると論じている。

まず、ホッブズとの違いから見てみよう。自然状態は、ホッブズの言うような「万人の万人に対する闘争」にはならないのだとルソーは言う。というのも、彼の想像するところによれば、そこには争いの種になる稀少財も、争いの原動力となる無限の意欲も存在しないからである。

「もしだれかふたりが同一のものと意欲し、それにもかかわらず、ふたりがともにそれを享受することができないとすると、かれらはたがいに対となる」とホッブズは述べ、稀少財をめぐる無限の欲望が自然状態に死闘を出現させる」と主張した。肉体的能力も精神的能力もさほど異ならない「生まれながらにして平等」な人間は、平等に目的

を達成できるはずだという「希望の平等」を信じる。そして、それが実現されそうにないとき、「相手をほろぼすか屈服させようと努力する」のだとホッブズは論じた。³⁷

これに対して、ルソーは、全く違う「自然状態」を想像する。つまり、そこには、まだ数の少ない人間が広大な自然のなかに分散し、その恩恵を一杯に受けて満足している牧歌的な光景が広がっている。

というのも、彼の考えるところによれば、第一に、人間は、自然状態にあっても比較的容易に食糧を確保できる。つまり、人間は、それほど強い生き物ではないが、「他の動物たちが分けあっているさまざまな食物の大部分をすべて自分の食料とし、したがって、どの動物もが行なえる以上に容易に自分の糧を見つける」ことができる。³⁸

第二に、ルソーによれば、人間は、元来、ホッブズが描くような「大胆で、攻撃し、戦うことしか求めない」存在ではない。それどころか、素朴な自己愛と憐れみの情（同胞が苦しむのを見ることを嫌う生得の感情）をもつ、善良で、かなり臆病な存在である。万が一、同じ食物をめぐる衝突したとしても、「打ち負かすことの困難とほかで食糧を見つけることの困難とを比較してからでなければ、けつしてなぐりあうことにはならないし、誇りが闘争にはいりこむことはない」ので、いくつかなぐりあって終わりになり、勝利者が食べ、敗者は幸運を探しに行き、すべてはおさまる」のである。³⁹

それでは、いつ、そして、なぜ闘争が始まるのだろうか。よく知られているように、ルソーは「事実上の社会」の成立にその転換点を見出した。「大洪水や地震が、人間の住む地域を水や崖で取り囲み、地殻の変動が大陸の一部を切り離して島にした」という自然の計略と人口の増加から、人間は次第に近づきあい、結合せざるをえなくなる。⁴⁰そして、原初的な独立を享受している「自然状態」から引き離され、（まだ市民社会にはなりえていない）「事実上の社会」

に参加する。そうすると、人間は歪められた存在になってしまうのだ。

人間同士の交流とコミュニケーションが増大し、所有が始まって、そこに不平等が組み込まれる。すると、人間は原初的な独立性を失って自己と他者とを比較するようになり、それまでは抱かなかったさまざまな情念や不安や欲望に突き動かされるようになる。各人の心のうちに他人の利益よりも自分の利益を優先したいという感情が生まれ、原初的に有していた素朴な人間愛は弱められてしまう。

こうしてルソーが想像する「事実上の社会」の人間は、「自然状態」に置かれたホップズの人間のイメージに近くなる。人間は、利得と安全と栄光を追い求めて闘争する。ルソーの描く「社会のなかの人間」は、「第一に必要なものを、次には余分なものを確保することが問題で、そのあとで享楽が、次に巨大な富が、その次に家来が、その次に奴隷がきて、一瞬たりとも休む間がなく、さらに奇妙なことは、欲求が自然なものでなくなり、差し迫ったものでなくなればなくなるほど、情念はますますふえ、さらに悪いことには、それを満足させる力もふえてきて、長い繁栄ののち、多くの財宝のみこみ、多くの人々を嘆かせたあとで、わが主人公はついにすべてを搾り取り、世界のただ一人の支配者となるにいたる」のである。⁴¹

ルソーによれば、この「事実上の社会」において諸個人を惨めにする要因は、国家間にも基本的に作用するという。つまり、たいいていの国家は、他国と相互に依存して原初的な独立性を失い、他国の行動や意見に左右されるようになる。そして、他国との不平等に気づくようになる。こうして諸国家は祖国愛のような素朴な自己愛よりもナショナリズムのような他者との相互作用から生まれる自尊心によつて動かされるようになり、少しでも自身に有利な状況を作り出そうとして苛烈な競争に従事するようになる。

「事実上の社会」においてさえ法が守られるのは「わたしが他人のためにその定めを細心の注意を払って遵守する一方で、他人もまたわたしのためにその定めを遵守すると確信できる場合に限られ」る。⁴²しかし、世界国家が存在せず、複数の主権国家に分裂している国際社会においては、そうした信頼関係を作り出すのはなおさら容易ではない。しかも、そもそも国家創設の目的のひとつは「内部の者」を「外部の者」から守ることにあるわけだから、たとえ国内で戦闘が終息したとしても、それは国外に移動するに過ぎないのである。⁴³

一見してわかるように、以上の二つの見方は異なっているばかりでなく、互いに相容れない部分もかなりある。たしかにホッブズもルソーも権力闘争の根源を、人間のなかに潜む野蛮な動物的衝動よりもむしろ人間を人間たらしめている特質のなかに見出している。この点はまことに興味深い。しかし、ホッブズが闘争の主要な原因を人間の本性に求めているのに対して、ルソーは人間が置かれた状況の力学にそれを見出している。

二つの見解のどちらに傾くか、そして「人間性に根ざす権力衝動」と「状況がもたらす権力行動」を区別することにどれだけ力を注ぐかは、リアリストたち自身も直面してきた難しい問題である。しかし、これについては、ここでは詳述を控えることにして、とりあえず次のことを確認しておこう。すなわち、国際政治から力の闘争を除去しようとすることは、人間が人間であるという「現実」と諸国家が世界政府のない無政府状態（諸国家間に「事実上の社会」さえ成立していない状態）に置かれているという「現実」を無視することに他ならない。こうリアリストたちは見ているのだと。

b. 権力政治を除去しようとする誤り

国際政治が権力闘争であることを認めるべきだとリアリストたちが考える二つ目の理由は、それがもたらす結果にかかわるものであろう。先にも見たように、リアリストたちとて何も闘争を好んでいゝわけではなく、それを望んでいるわけでもない。それどころか、彼らは平和を目標としているし、できるだけ人を殺さなくてもよい状態、人間を悲惨な状態に落とし入れない世界を切望している。そしてそれゆえに「現実」から出発しようとする。つまり、権力闘争を常態とみなしたほうが結局は「よりよい結果」を実現できる可能性が高くなると考えるがゆえに、彼らはそうするのである。

リアリストたちの見るところ、権力闘争を異常とみなす者は、それを排除しようとして逆に災いをもたらすことが少なくない。「この世の悪」を根絶しようとして冷静さを失い、自分の行動の「予測しうる結果」を見失ってしまう。つまり、国家間の権力関係を調整しようとするよりも「不健全な」権力政治を除去しようとして慎慮を欠いた行動をとるのであり、その行動が往々にして「善を欲して悪をなす」ことをリアリストたちは問題にするのである。

この点について彼らが展開した具体的な議論をいくつかあげてみよう。まず前節で概観したリアリズムの草分けの一人といつてもよい E・H・カーの論考もそのひとつである。第一次世界大戦という大惨事を経験した人びとが平和を強く望むがゆえに権力政治を除去しようとし、それによっておちいつてしまった陷穽をカーは鋭く指摘した。

これに加えて、ハンス・モーゲンソーに代表されるアメリカのリアリストたちの論考も見過ごすことはできない。というのも、イギリス人のカーの努力を継承したのは、主としてアメリカ人たちだった。そして、なかでもモーゲンソーは、「国際政治学の創始者」とも呼ばれる無視することのできない大きな存在だからである。⁴⁴

ハンス・モーゲンソーは、一九〇四年にドイツ南東部のバイエルン州でユダヤ人の一族に生まれた。フランクフルト大学とミュンヘン大学で学んだ後、スイスのジュネーヴ大学で国際法の教鞭をとったが、(ゲシュタポのメンバーが学生のなかにも混在しはじめるなど)ナチスの浸透を感じるようになって三年後にスペインのマドリッドに移住。国際・経済研究所の客員教授となった。しかし一年後にそのスペインで内戦が勃発。新婚旅行先のイタリアからフランスのパリに逃れ、一九三七年(三十三歳の時)にアメリカに移住した。そこで国際政治を本格的に論じることになったのである。⁴⁵

その理由はいくつかあるが、なかでも大きかったのは、アメリカ人の多くが国際政治に関する理想主義的幻想を抱いている、とモーゲンソーが見たことにある。アメリカ人は、カーが戦間期に批判したイギリス人たちよりも、さらに理想主義的な側面をもっていた。つまり、長い経験に裏打ちされた一定の外交感覚をもつ人びとではなく、外交が何たるかをほとんど理解していない「新世界」の人びとだった。しかも、モーゲンソーが渡米した頃には、幸か不幸か、そのアメリカが世界を動かす超大国になりつつあったのである。

モーゲンソーは、第二次世界大戦後の一九四八年に国際政治学のテキスト『諸国間の政治』を英語で出版する。そのなかで彼は、国際政治において力が果たす役割が軽視されていることを問題視し、それがとりわけアメリカにおいて顕著であると主張した。そしてその理由を「十九世紀の哲学」と「アメリカの経験」に求めた。⁴⁶つまり、アメリカ人たちに、自身の来歴を自覚し、そこから生じている弱点を克服するように訴えたのである。

それは概ね次のような議論であった。十九世紀のヨーロッパにおける最大の課題は貴族階級による暴力的支配の打倒だった。そしてそれは多くの困難と犠牲を伴うものであったがゆえに、闘いの精神的な支えとなる信仰のようなも

のを生み出した。すなわち、暴力的支配を打倒しさえすれば、国内問題においても国際問題においても政治権力をめぐる闘争は消滅すると広く信じられるようになったのである。

この「十九世紀の哲学」はアメリカにも波及し、そこで当然のように強められることになる。というのも、アメリカは、イギリス王室との憲法的なつながりを切断し、暴力的支配から解放された国として出発した。そのうえ、地理的条件に恵まれていたため、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなどで繰り広げられる国際的な権力闘争に巻き込まれずにすんだ。つまり、この国の人びとは、「いたるところに民主主義が確立されると、最後の幕が降ろされて権力政治のゲームはもはや演じられなくなる」と信じて事態を傍観することが許された。こうして、「権力政治に巻き込まれることは不可避ではなくて歴史的偶然に過ぎず、それゆえ諸国家は権力政治か、力への欲求に毒されていない別種の対外政策かのいずれかを選択できるという信念」がアメリカにおいては保持されるようになったのである。

信念が幻想であるとき、それはたとえ善意に発するものであっても結果的には害悪をもたらすことが少なくない。モーゲンソーが見出した、そうした実例を概観してみよう。⁴⁷それは、まさに当時の国際政治の中心舞台で展開されていた光景である。一九四八年当時の世界は「権力闘争は除去できるものだ」というアメリカ人の信念のために多大な損害を被っていた。彼らの理想主義的幻想が米ソ対立を必要以上に激化させていたのである。

少し詳しく見てみよう。当時は第二次世界大戦が終わって間もない頃だが、まず、大戦自体に対するアメリカの看法がそもそも問題だとモーゲンソーは見ていた。すなわち、ソ連のスターリン共産党書記長が第二次世界大戦を「戦前からつづく国家間の権力闘争の手段」と考えていたのに対して、アメリカのローズヴェルト大統領は戦争を「全面勝利と無条件降伏とによって万事が終わる」権力闘争を超えた平和への最後の試練だとみなしていた。このため、ア

メリカは、いったん戦争が終わると、ソ連を自分たちと同じような「平和」を求めている国だと思い込んで一方的に信頼し、確固たる姿勢を示せなかった。少なくとも戦争と同じくらい重要な戦後処理の局面において、東欧とバルカン半島の大部分を事実上ソ連に引き渡すという愚かな譲歩をした。

また、「権力政治に代わるもの」として国際連合が主導する普遍的で法的な世界秩序と集団安全保障を提案し、自分たちは「何らの利己的な利益を求めないで、もっぱら普遍的な道徳的原理に立っているのだと考えて、いい気持ちになつていた」。

こうして、間もなくスターリンが東欧の勢力圏を固める動きに出たとき、虚を突かれたアメリカはそれを「裏切り」とみなして冷静さを失い、実際の交渉と意思疎通の努力をはかれなくなつてしまった。つまり、冷戦の初期には権力闘争の、後には外交交渉の永続性を無視することによつて、米ソ間の緊張を劇的に高めてしまつていたのである。

興味深いことに、こうしたモーゲンソーの分析は、対ソ「封じ込め」政策を立案した冷戦の当事者であり、後にアメリカを代表するもうひとりのリアリストとみされることになるジョージ・ケナンの見方とも、ほぼ一致していた。⁴⁸出自も経験も違う二人の見解は、少なくとも、この時点では驚くほど類似していた。

モーゲンソーと同年の一九〇四年にアメリカのウィスコンシン州で生まれ、プリンストン大学卒業後にロシア専門の外交官として訓練を受けていたケナンは、四十代になつた一九四四年からモスクワのアメリカ大使館に勤めていた。そしてそこから、第二次世界大戦が終わればソ連と共同で平和を構築できると信じていたアメリカ政府に対して、それが幻想であることを説きつづけた。

ロシアを熟知していたケナンの見るところ、ソ連の外交政策の原動力は「ロシア国内の基本的必要」と「ロシアの

伝統的かつ本能的な不安感」にあった。⁴⁹つまり、残虐な独裁制を弁護してくれるイデオロギーと、歴史的に東西双方から攻撃されてきたという恐怖が、その対外行動の源泉だった。絶対的な安全保障を求めるソ連に、第二次世界大戦で得た勢力圏を手放す気はない。それどころか、機会があればそれを拡大する意図をもっているのであり、アメリカはソ連と共同するよりもまずその脅威をせき止めなければならない。こうケナンは考えていたのである。

よく知られているように、当初ケナンの見解は一顧だにされなかった。しかしその後、ソ連の「裏切り」に驚愕したアメリカ政府は、一九四七年に急遽ケナンが発案していた「封じ込め」政策を採用することになる。だが、それは不幸にも、ケナンが考えていたよりもはるかに過剰な冷静さを欠いたものであった。つまり、アメリカ政府はアメリカの国益にとって重要な国（ケナンによれば、西欧諸国と日本）だけでなく、「世界中の自由な諸国民」を「直接または間接の侵略」から守るという壮大な闘いの開始を「トルーマン・ドクトリン」として宣言してしまったのである。

以上のようにリアリストたちの見解は、明快であり類似している。歴史的文脈と背景こそ異なるが、モーゲンソーやケナンが第二次世界大戦直後に批判したのは、カーが戦間期に標的にしたものと基本的には同類の、ある意味で典型的な理想主義的幻想だった。それは、彼らの見るところ、権力闘争を直視せず、その現実から目をそらした独善的な思い込みといってもよいものだった。そして、その反動として、逆に必要以上の権力闘争を招きうるものだったのである。

c. 権力闘争を制約するもの

権力闘争を必要以上に激化させてはならない——ここで気づかされるのは、モーゲンソーやケナンのようなリアリ

ストたちの議論の背後に、少なくとも二つの信念が存在していることであろう。

ひとつは認識レベルのものである。リアリストたちは、国家間の権力闘争を常態とみなしはしたものの、それが常に生か死の闘争になるとは考えなかったし、国際政治が力の闘争につきるとも考えていなかった。一方で「やすむことのない」権力闘争の不可避性とそれがエスカレートする危険性を説いたが、他方で、その危険性が常に無限定なものにはなるわけではないと信じていた。というのも、そこにはさまざまな制約が働きうると彼らは考えていたからである。

リアリストたちの考えの原型を構築したホッブズとルソーに戻ろう。ホッブズによれば、国際政治における権力闘争を抑制しうるのは、諸国家の功利主義的思考である。彼は「自然状態」において諸個人が「万人の万人に対する闘争」に陥り、その耐えがたい悲惨さゆえに諸個人が「自然状態」を抜け出して「レヴァイアサン」たる国家を設立していく姿を描いた。諸個人は「万人の万人に対する闘争」を繰り返すよりも、暴力を国家に独占させたほうが効用が大きいと考えるに違いない。こうホッブズは推測した。

だが興味深いことに、ホッブズは、国家間に同じことが起こるとは考えなかった。諸国間に常に「戦争状態」が存在してきたのは確かである。しかし、ホッブズの見るところ、国家間の「自然状態」における国民の生活は、個人間の「自然状態」における人間の生活ほど、「孤独でまずしく、つらく残忍でみじかい」ものにはならない。それは個人間の「自然状態」とは異なり、国内の個人にとって耐えうるものである。⁵⁰

なぜであろうか。第一に、国家は、普通、個人よりも強い。つまり、多くの場合、「自然状態」における国家は「自然状態」下の個人ほど差し迫った絶滅の恐怖を感じないし、そのなかにいる個人も国家によって保護されている。「自

然状態」における個人は他者からの攻撃や病氣や老いによってたやすく命を落とすが、国家は通常そこまで脆弱ではなく、その成員にとって防衛の手段となる。いわば個人を守る楯となってくれるのである。

第二に、諸個人は肉体的能力においても精神的能力においてもさほど異ならないが、国家には大国もあれば小国もある。海洋国もあれば大陸国もある。その違いは個人間よりもはるかに大きい。少なくとも大国は小国ほど脆弱でないのが普通であり、それは広く認識されている。こうして、平等に目的を達成できるはずだという「希望の平等」は生じにくく、それゆえに「相手をほろぼすか屈服させよう」という努力も、多くの場合、「自然状態」における個人間ほど激烈にはならない。多くの小国は大国と同じ目的を達成できるとは期待しないし、大国による管理がある程度受け入れることも少なくない。つまり、国際政治には国内政治よりも大きな不平等がある程度受け入れさせる基盤が存在するのである。

こうして、国家間の権力闘争は永続しはするものの、それは「自然状態」における個人間のそれよりもはるかに穏健になりうるとホッブズは考えた。

人びとを平和にむかわせる諸情念は、死への恐怖であり、快適な生活に必要なものごとに対する意欲であり、それらをかれらの勤労によって獲得する希望である。そして理性は、つごうのよい平和の諸条項を示唆し、人びとそれによって、協定へとみちびかれうる。⁵¹

つまり、国家間に個人間のような「リヴァイアサン」（この場合は世界国家）が設立されることはないにしても、そこ

に「平和の諸条項」は創出されるのである。

実際、このようなホッブズの議論は、多くの時代や場所において、その妥当性を証明してきたと言ってよからう。たしかに諸国家の上位に世界国家は存在しないが、そこは通常、完全な無秩序でも「殺すか殺されるか」の世界でもない。ほとんどすべての国際政治学者たちが指摘してきたように、大半の諸国家間には、勢力均衡、外交、国際道義、国際法といったルールや規範や慣行が形成されてきた。それらは、先に述べた原初的な功利主義的思考と相俟って、さらに国家間の権力闘争を制約しうるものなのであり、リアリストたちとて、それを否定しているわけではないのである。

もちろん、こうしたルールや規範や慣行は盤石なものではない。それを鋭く指摘したのがルソーだった。彼が述べているように、たとえ大半の国が過度の権力闘争を避けようとしても、そうしよとしない大国がひとつでもあるかぎり、それは実現されえないかもしれない。すべての国家が功利主義的思考で動くとはかぎらないし、同じ方法で効用を計算をするともかぎらない。個人間と同じように国家間においても相互依存（他者との比較）はさまざまな情念や不安や欲望を生み出しうるのであり、それが功利主義的計算にも大きな影響を与えうる。こうして国際政治においては、共通利益ははかないものなのであり、イデオロギーや情念によつて簡単に吹き飛ばされてしまうこともある。内面的な確信や国内的な必要から国家間の不平等を絶対的に受け入れようとはしない国があれば、権力闘争は個人間のそれよりもむしろ激しくなりうる。⁵²

しかし、ここで注意すべきは、こうした恐るべき情景を描いたルソーでさえ、国家間の権力闘争が実際に常に無限定なものになるとは言っていないという点であろう。国際政治学者のスタンレー・ホフマンが指摘しているように、

ルソーのアプローチは「歴史的ではなく、理念型的」である。つまり、彼が説明しようとしているのは「事物の本性であつて出来事ではない」。ルソーは明らかに「比較的穩健な國際システムや比較的長続きする抑制も存在しうる」という歴史的事実を知っていた。ただ彼は、たとえ平和な状態が存在しても、その永続化を保証してくれるものは何もないという点に國際政治の本質を見て、それを意図的に抽象化した。つまり、ルソーの目的は理想主義的幻想に対して警鐘を鳴らすことであつたのであり、彼でさえ、現実の世界に、權力闘争を制約する要素が何もないと言つていたわけではないのである。⁵³

d. 權力闘争の緩和

ここでわれわれは、リアリストたちがもうひとつの信念に目を転じなければならない。それは、認識的なものではなく、規範的な信念である。リアリストたちは、國家間の權力闘争が必ずしも死闘になるわけではないという事実を単に認識するだけでなく、それを人間は緩和しうるし、また実際にそうすべきだと信じている。リアリズムはシニズムや現状追隨主義に陥りやすいとしばしば批判されてきた。しかし、少なくとも當のリアリストたちの多くは、こうした弱点の對極にあるといつてもよい強い信念を目的として抱いてきたのである。

それでは、どのようにすれば國家間の權力闘争を緩和できるのだろうか。先に見たように、リアリストたちの答えは一見、他の多くの論者とさほど異ならない。すなわち、彼らによれば、國家間の權力闘争を制約しうるのは、多くの場合、勢力均衡、國際道義、國際法、外交などであり、われわれが利用すべき手段もそういった國際社会に存在しうるルールや規範や慣行である。

ただし、ここで留意すべきは、権力闘争を緩和しようとする際にも、彼らにとって重要なのは、やはり権力闘争という「現実」を直視し理解することだという点であろう。

リアリストたちは、権力闘争のなかで自然に形成されたルールや規範や慣行を重視する。これは抽象的にいえば、短期間のうちに人為的・合目的に構築したもののよりも「一定の価値志向を外的環境の要求に適合させる過程において自然発生的に成育していく『規範』」を信頼するということであろう。永井陽之助は前者を「組織」と後者を「制度」と呼び、「制度」の支えなくして「組織」はうまく機能しないことを説いているが、他の多くのリアリストたちも基本的には同じ考えをもっていると思われる。⁵⁴

それは、たとえば言えば地盤のようなものである。長い年月をかけて自然に作られた土地の地盤は比較的強固である。しかし、何らかの目的のために短時間に人為的に造成された土地の地盤は脆弱で、天災にさらされると容易に地滑りや液状化を起こしてしまう。その上に家を建てる際には、強固な地盤にまで深く杭を打ち込まなければならぬ。

こうして二十世紀を生きたりアリストたちの多くが、権力闘争を緩和させる手段のなかでも、とりわけ勢力均衡を重視したことが理解されよう。それは、ヨーロッパで領土的主権国家が確立された十七世紀の半ばから長期にわたる国家間のせめぎ合いのなかでほとんど自然に生成された暗黙のルールだった。高坂正堯の説明を借りれば、「国家という力の単位が、自らを拘束する権威も法則も、なんら認めない状況においては、相反する要求や利害の妥協、相争う勢力のあいだの均衡以外に、状況を安定させる方法は存在しなかった」⁵⁵。つまり、それは長期間の権力闘争のなかから「苦肉の策」として発生した「制度」だったのであり、たとえば第一次世界大戦後の短期間に、平和のために人為的に

構築された「集団安全保障」(国境の侵害を犯罪とみなし、それを集団で撃退するという法律的規則)とは本質的に異なるものであったのである。

実際、E・H・カーが目撃したように、国際連盟規約に明文化された「集団安全保障」は、十数年間、何とか体面を保ったものの、満州事変(一九三一年)とイタリアのエチオピア侵攻(一九三五年)という重大な局面になると効力を失ってしまった。国際連盟の有力加盟国だったイギリスとフランスは、いざとなると、アジアやアフリカといった遠隔地で起きた違法(侵略)行為の処罰よりも、眼前に台頭しつつあったヒトラーのドイツの力への対処を優先せざるをえなかった。満州事変に対しては、経済制裁すら実行できなかった。イタリアのエチオピア侵攻に対しては、対独勢力としてイタリアを引き込むべくエチオピアの半分をイタリアに統治させることさえ検討する有様であった。こうして集団安全保障の上に構築された平和は、それが勢力均衡に支えられていなかったがゆえに、脆くも崩れ落ちてしまったのである。

(注)

³¹ この点については、高坂正堯「現実主義の国際政治観」、『高坂正堯著作集』第七巻(都市出版、二〇〇〇年)、一九二―二一八ページに多くを負っている。

³² Thucydides, *The Peloponnesian War: The Complete Hobbes Translation* (Chicago: The University of Chicago Press, 1989).

³³ Thomas Hobbes, *Leviathan* (New York: Cambridge University Press, 1991), p. 76. 邦訳、水田洋訳『リヴァイアサン(一)』(岩波文庫、一九九二年)「一八一ページ」。

³⁴ *Ibid.*, p. 70. 邦訳、前掲書、一六八ページ。

- 35 *Ibid.*, p. 70. 邦訳、前掲書、一六九ページ。
- 36 *Ibid.*, p. 88. 邦訳、前掲書、二二〇～二二一ページ。
- 37 *Ibid.*, p. 87. 邦訳、前掲書、二〇八ページ。
- 38 ジャン＝ジャック・ルソー、原好男訳「人間不平等起源論」、『ルソー全集』第四卷(白水社、一九七八年)、所収、二〇三ページ。
- 39 同上書、二〇四(二七二)ページ。
- 40 同上書、二三七ページ。
- 41 同上書、二七二ページ。
- 42 ジャン＝ジャック・ルソー、中山元訳「ジュネーヴ草稿」、『社会契約論／ジュネーヴ草稿』(光文社古典新訳文庫、二〇〇八年)、所収、三二二ページ。
- 43 この点については Stanley Hoffmann, "Rousseau on War and Peace," in *The State of War: Essays on the Theory and Practice of International Politics* (New York: Frederick A. Praeger, 1965), p. 73. 邦訳「ルソーの戦争・平和論」、中本義彦編訳『スタンレー・ホフマン国際政治論集』(勁草書房、二〇一一年)、所収、一六八ページ、参照。
- 44 この点については Stanley Hoffmann, "An American Social Science: International Relations," in *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Boulder, CO: Westview, 1987), p. 6. 邦訳「アメリカン・ソーシャル・サイエンス——国際関係論」、前掲『スタンレー・ホフマン国際政治論集』、所収、九九ページ、参照。
- 45 以上の点については、モーゲンソーの自伝的エッセーである Hans J. Morgenthau, "Fragment of an Intellectual Autobiography: 1904-1932," in Kenneth Thompson and Robert J. Myers, eds., *Truth and Tragedy: A Tribute to Hans J. Morgenthau*, Augmented Edition (New Brunswick: Transaction Books, 1984), pp. 1-17. 及び、宮下豊『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』(大学教育出版、二〇一二年)、三〇六～三〇八ページ、参照。
- 46 Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace* (New York: Alfred A. Knopf, 1948), pp. 18-20. 邦訳(ただし改訂第五版)、現代平和研究会訳『国際政治——権力と平和』(福村出版、一九八六年)、三九～四一ページ、参照。
- 47 以下については、Hans J. Morgenthau, *In Defense of National Interest: A Critical Examination of American Foreign Policy* (New York:

Alfred A. Knopf, 1951), Chapter IV. 邦訳、鈴木成高・湯川宏訳『世界政治と国家理性』(創文社、一九五四年)、第四章、参照。

⁴³ 以下に「つづは」George F. Kennan, *Memoirs 1925-1950* (Boston: Little, Brown, 1967). 邦訳、清水俊雄訳『ジョージ・F・ケナン回顧録——対ソ外交に生きて』上(読売新聞社、一九七三年)、参照。なお、ケナンについては、拙論「ケナンを知るためのケナン論」『外交フォーラム』二〇〇六年二月号も参照。

⁴⁹ この点については、とくに、ケナンが書いたと思われる「X論文」「すなわち」Mr. X, "The Sources of Soviet Conduct," *Foreign Affairs*, XXV, No. 4 (July 1947), pp. 566-82 を参照。

⁵⁰ この点については、Hofmann, "Rousseau on War and Peace," p. 60. 邦訳、前掲書、一五五ページ、参照。

⁵¹ Hobbes, *op. cit.*, p. 90. 邦訳、前掲書、二二四ページ。

⁵² ジャン＝ジャック・ルソー、宮治弘之訳「サン＝ピエール師の永久平和論抜粋」、「永久平和論批判」、「戦争状態は社会状態から生まれるということ」、「ルソー全集」第四巻、所収、三二一～三八七ページ、参照。Hofmann, *op. cit.*, pp. 62-71. 邦訳、前掲書、一五七～一六六ページも参照。

⁵³ *Ibid.*, p. 71, 87. 邦訳、同上書、一六五～一六六、一八三ページ、参照。

⁵⁴ 永井陽之助「政治学とは何か」、永井・篠原一編『現代政治学入門「第二版」』(有斐閣、一九八四年)、一二ページ。

⁵⁵ 高坂正堯『国際政治——恐怖と希望』(中公新書、一九六六年)、二三ページ。

三、権力闘争の個別性

最後に、リアリズムは、国際政治において不変の継続的要素を強調するアプローチだというナイの理念型の中核にある主張を取り上げよう。リアリストたちは、どのように、そして、どの程度、国際政治における継続性を強調してきたのだろうか。ここでは、前節で見た彼らの二つの主張、つまり、「国際政治は権力闘争である」という命題と、「権

力闘争を緩和させるうえで、最も有効な手段は勢力均衡である」という議論に焦点を絞って概観してみよう。

すでに見たように、リアリストたちは一方で権力闘争の普遍性を説いている。権力闘争は、「時と場所を超えて普遍的であり、否定することのできない経験的事実」だというのが彼らの主張である。⁵⁶しかし、ここで注意すべきは、そうした認識自体がわれわれの「現実」理解を過度に単純化させてしまう危険を彼らが熟知していたということ、そしてそれを強く警戒していたということであろう。

リアリストたちは、権力闘争の緩和を説きながら、その際に、緩和させようとする権力闘争の程度と性質をできるだけ正確に把握する必要性を強調している。というのも、彼らにとって、権力闘争は普遍的でありかつ、個別的なものであった。つまり、権力闘争の遍在性を認めることは「現実」理解の第一歩に過ぎないのであり、同様に重要なのは、その程度や性質の個別性をどれだけ正確に把握できるかであった。それなくして、リアリズムは真の実践的思惟たりえない。つまり、実際に利用可能な手段と到達可能な目的を見定めることはできない。こうリアリストたちは考えていたと思われるのである。

それでは、リアリストたちは、そうした個別性を、どのように認識していたのであろうか。大まかに言えば、それは、時間と空間、つまり「時代による個別性」と「地域による個別性」の組み合わせによる認識だったと言えるであろう。順に見てみることにしよう。

a. 時代認識

言うまでもないことだが、現在の「現実」は過去と未来の間にある。つまり、われわれが見る「現実」は、われわ

れが過去をどう見るか、未来をどう見るかによって様相を異にする。もちろん、それは、リアリストにとっても同様である。そして、この点で興味深いのは、二十世紀に生きたリアリストたちが、ほぼ一様に「近代国際システムが生まれて以来、今日ほど国際舞台において権力闘争への制約が弱い時代はない」と見ていたということであろう。⁵⁷

なぜであろうか。先に、われわれは、リアリストが「制度」を重視することを確認した。長い年月をかけて自然に出来上がったインフォーマルな規範が存在してこそ、権力闘争は効果的に緩和されうる。こう彼らは考えていた。しかし彼らは、同時に、その「制度」が融解した時代に生きていると信じ、それを強く意識していたのである。

よく知られているように、ローマ帝国が崩壊し、混沌とした中世を経て、国家が国際政治の支配的な構成単位になりはじめたのは、三十年戦争を終結させたウェストファリア講和会議（一六四八年）以降のことである。ヨーロッパでは、それ以前の長く激しいせめぎ合いのなかで徐々に「ヨーロッパ国際体系」とも言われる制度が形成され、権力闘争が比較的うまく緩和されるようになった。それは基本的に勢力均衡と外交のシステムであり、そこでは国際システムが穏やかに機能する二つの条件がそろっていた。⁵⁸

第一に、客観的な勢力均衡が存在した。そこには四ないし五くらい強い強国が存在し、それらの国の力が「他国のなすがままにならない」程度に均衡していた。つまり、大国の「自立性」が確保されていた。また、軍事テクノロジーの面でも強国間に大きな落差はなく、武器の強度は相対的に（弱いまま）安定していた。

第二に、主観的な勢力均衡も存在した。つまり、多くの場合、「大国間の勢力はほぼ均衡している」と各国は見えていたし、「他国も勢力均衡のルールを意識し、是認している」と考えていた。こうした相互の信頼感は、大国がいずれもヨーロッパ文化圏に属して「同質性」を保持していたこと、国家を統治した貴族たちが国境を越える身分的一体感や

姻戚関係で結びついていたこと、そして外交が国内の世論やイデオロギーから比較的自由だったこと（つまり、外交が「貴族性」を保持していたこと）などに支えられていたと言えるだろう。時に「古典外交の時代」とも言われるように、自立性・同質性・貴族性という、外交が勢力均衡をうまく調整できる条件がそろっていた。これに加えて、大国と小国のあいだに一種の位階秩序が存在し、小国間の紛争を局地処理できる威信を大国が保持していたことも重要であろう。

こうして諸大国は、一方で激しい競争に従事しながらも他方で相互抑制のルールを確立していた。大国間の戦争は起こったが、多くの場合、それは敵国の絶滅を目指すものではなく、戦闘の方法についても、それを限定する暗黙のルールのようなものが存在した。誤解を恐れずにいえば、十八世紀から十九世紀半ばにかけてヨーロッパで起こった戦争の多くは、その意味で勢力均衡のルールにもとづく君主間の競技のようなものだった。高坂正堯が鋭く指摘したように、ここでは、「勝つという目的だけが重要ではなく、ゲームそのものが重要」だったのであり、そうした「自制と均衡を重んずる十八世紀文明は人生のゲームを楽しむ精神と深いところでつながっていた」のである。⁵⁹

だが、この「ヨーロッパ国際体系」は、フランス革命とナポレオン戦争の打撃からは何とか回復するものの、十九世紀の終わり頃からついに崩壊していく。フランス革命以来、水面下で広がっていた革命の理念がボディーブローのようにじわじわと効いてくる。大衆民主主義が台頭し、自由や民主主義を唱えるリベリズムと民族自決権を掲げるナシヨナリズムが生真面目で堅苦しいイデオロギーとなつて外交にも大きな影響を与えはじめる。国境を越える貴族社会は徐々に衰退した。政治指導者たちが住民の意思を無視して勢力圏や緩衝地帯を設定することも国家の統一を止めることも困難になり、勢力均衡という相互抑制を維持することは容易ではなくなった。

戦争は限定的な「必要性」よりも無限定で普遍的な「自由」や「民族解放」のために戦われるようになり、激しさを増していく。さらに産業革命の波及によって、鉄道などの輸送手段、新聞などのマスメディア、重砲などの武器が発達し、戦争の拡大と激化を加速させた。その沸点が資源の動員という点でも目的の点でも手段の点でも全面的な「全体戦争」であり、それが二度の世界大戦として戦われて「ヨーロッパ国際体系」を決定的に吹き飛ばしてしまったのである。

リベラリズムが台頭したことから「進歩の時代」と呼ばれることもある十九世紀だが、リアリストたちにとっては、それは一義的には「崩壊の時代」であつたといえよう。そして彼らの多くは、自分たちが生きた第二次世界大戦後の「現実」を、この崩壊の延長線上に見ていたのである。

大国の数は二つに減少し、しかもその二国は他を圧倒する「超大国」となって真正面から対立していた。二超大国はそれぞれリベラリズムとマルクスレーニン主義という普遍的正当性を主張するイデオロギーを掲げて相手国の体制の消滅を願っていた。「辺境」の緩衝地帯の多くは、旧植民地から独立した新興国の脆弱さゆえに暴力を十分に管理できず、大国の干渉を受けて「国際的内戦」の舞台と化した。また、ナシヨナリズムは国家間の「平等化」を推進し、「文明国」と「後進国」、大国と小国の階層秩序を破壊した。⁶⁰

こうしてリアリストたちが対峙した「現実」は、「ヨーロッパ国際体系」どころか、フランス革命後のナポレオン戦争の時代かウェストファリア会議前の宗教戦争の時代を彷彿とさせるものだった。十八世紀という「自制と均衡の時代」、十九世紀という「崩壊の時代」の後に彼らが見ていたのは、二十世紀という「野蛮の時代」の到来だったといっても過言ではなからう。

しかし重要なのは、それでもなおリアリストたちが権力闘争の緩和が可能だと信じたことであり、そのために何をなすべきかについて苦悩し、知力を振り絞ったということであろう。彼らは大体において上述した共通の歴史認識に立ちながら、戦後世界の特定の時期と場所における権力闘争の程度と性質を観察した。そして、政策提言を果敢に行ない、それをめぐってリアリスト同士で論争することさえあった。彼らは、どのような処方箋を提示したのであるか。ここでは、リアリストたちが最も活躍した時期のひとつである冷戦初期の一九五〇年代において、彼らがヨーロッパにおける権力闘争とアジアにおける権力闘争をどう認識していたのかを概観してみよう。

b. ヨーロッパの権力闘争

あらためて言うまでもなく、冷戦という時代は、平和でも戦争でもない時代であった。リアリストでもあったレイモン・アロン(一九〇五―八三)が一九四八年に予言していたように、「平和は不可能だが、戦争は起こりそうにない」状態だった。⁶¹ そうした諦念と希望の間で、アメリカは、ケナンが提唱した「封じ込め」政策を採用していた。つまり、「西側が自分たちの社会の健全さと活力を保ち、ソ連のイデオロギーに対する免疫力を保持すれば、矛盾を抱えているソ連の体制は最終的には自壊するであろう」という「辛抱」と「待ち」を基調にする戦略を掲げていた。

しかし、「リアリスト」イコール「冷戦の擁護者」とみなしている人には意外に思われるかもしれないが、リアリストのなかには、このような「辛抱」と「待ち」の戦略に完全には満足していない論者も存在した。というのも、彼らの見るところ、一九五〇年代のヨーロッパにおける権力闘争の様相はあまりに暗いものになりつつあった。現状維持を基調とする政策は、事態の悪化を放置するだけであるように思えたからである。⁶²

ひとつには、〈安全〉の問題が存在した。ソ連はアメリカの予測よりもはるかに早い一九四九年に核実験に成功し、大量破壊兵器の製造に力を注いでいた。もともと通常兵力で優位にあったソ連が原爆を開発したことによって、ヨーロッパにおける軍事力の均衡はソ連側に有利に傾きはじめた。そしてさらに一九五七年にはロシアが最初の大陸間弾道弾（ICBM）の発射実験に成功した。これを境に、米ソ間の核軍備競争は新しい段階へと激化する兆候を見せていた。

もうひとつは、〈安全〉の問題と密接に関連しているが同時にトレード・オフの関係になることも少なくない〈自立〉をめぐる問題である。グローバルな権力闘争であり、異なる体制間の闘争でもある冷戦下にある以上、超大国は他国の国内体制に無関心ではいられない。しかも、米ソによる明白な（グレー・ゾーンのない）ヨーロッパの分割は、双方の勢力圏が相互に尊重されるかぎりヨーロッパの〈安全〉に大きく寄与しうるかもしれない。しかし他方で、リアリストたちは、他国の〈自立〉を過度に奪おうとする政策に対しては、その「不自然さ」を感じないわけにはいかなかった。そして、その主体がアメリカであれ、ソ連であれ、異議を唱えないわけにはいかないとも考えていた。

モーゲンソーのドイツに対する態度は、この〈安全〉と〈自立〉の狭間に置かれた彼の苦悩をよく表わしている。一九五〇年代の初頭、モーゲンソーは、祖国の将来に強い不安を感じていた。というのも、もしソ連が「ドイツ統一」と「統一ドイツの旧東部国境線の回復」を取引材料にして西ドイツに接近すれば、西ドイツが米英仏の反対を振り切つてでも、これに応じる可能性は排除できないように思われた。そうなるとドイツは、アメリカよりもソ連に傾いてしまい、ドイツをめぐる権力闘争はさらに激化するかもしれない。西ドイツがアメリカの勢力圏におさまれば安全は確保されるだろう。しかし、そうならないほうが自然だし、西ドイツによるドイツ統一の模索にともなって起こりうる

最悪の事態を避けなければならない。こう彼は考えていた。⁶³

モーゲンソーだけではない。興味深いことに、「封じ込め」政策の発案者であるケナンもドイツの分割は長期的には「現実的ではない」と考えていた。⁶⁴戦時下のドイツのアメリカ大使館に勤務した経験をもつ彼は、ドイツ人が民族共同体の意識を深めるのを目の当たりにしていた。堅固な国民意識をもつ国の〈自立〉を奪うことは、国際関係における伝統的な基本原理を侵害することであり、その国の「健全さと活力」の源泉を奪うことでもある。そして、さらに重要なことに、〈自立〉を奪われる国のみならず、それを奪う国の国益をも損ねてしまう。というのも、たとえばアメリカが無期限に自国軍を同盟国に駐留させ、その国を従属させることは、結局のところ、その同盟国の面倒を見る過重なコストをアメリカ自身に背負わせることになるからである。⁶⁵

こう考えていたケナンは、折に触れてドイツ分割の固定化に反対し、西ドイツが再軍備し北大西洋条約機構（NATO）に加盟した後になっても、その立場を基本的には変えなかった。⁶⁶それどころか、一九五七年には、ドイツのみならず中欧と東欧における東西の「兵力引き離し」交渉の開始をイギリス放送協会（BBC）のラジオ講義（BBC創業者の名前を冠して「リース講義」と呼ばれる）で大々的に提案したのである。⁶⁷

もちろん、ここで重要なのは、ドイツの〈自立〉をめぐる問題だけではなかった。他ならぬ「現実」が変化していたのである。駐ソ大使を半年ほど務めて五三年に外交官を引退したケナンは、ほぼ同時期にソ連の独裁者スターリンの死を知らされる。そして、この事件を契機に、事態が大きく変わっていくのを目撃する。ソ連では経済が発展し、それとともに自由を求める声が高まっていた。ケナンがリース講義を行なう約三ヶ月前には、ロシアが最初の大陸間弾道弾（ICBM）の発射実験に成功していた。そして、何よりも、東ドイツ（一九五三年）、ポーランド（五六年）、

ハンガリー（五六年）では暴動が立て続けに起きていた。

東欧の人びとは、ソ連の支配に対して明らかに強い不満をもっている。にもかかわらず、たとえ彼らが反乱を選択しても、西側はソ連と戦争をする覚悟でもないかぎり、彼らを直接的に助けることはできない。一連の暴動の結果、この冷厳な「現実」が白日の下にさらされ、東欧では失望が広がっていた。これを〈安全〉のためには仕方がないと思われるかどうか、ケナンの心は大きく揺れ動いたのである。

以上のようにリアリストたちは、冷戦初期のヨーロッパにおける権力闘争の激化を見てとり、これを主として〈安全〉と〈自立〉をめぐる問題として捉えていた。彼らにとって問題は、不満足な現状に「辛抱」できるか否かだけでなく、現状がはらむ「恐怖」と「不安」を将来に向けていかに軽減していくかであった。そして、そうした認識のもとに権力闘争を緩和させる方策を練ったのである。

一九五一年にモーゲンソーは、西側はまず「本格的な再軍備」にとりかかるべきだと主張した。ソ連を、ヨーロッパ全体に支配的な影響力を及ぼすような国にしてはならない。そして、それを予防して対ソ交渉が「対等で成功の見込みのある」ものになった時点で、速やかに統一ドイツの中立化をはじめとするヨーロッパにおける勢力圏の画定についての話し合いをソ連と始めるべきだ。こう彼は説いた。西ドイツがソ連へとなびいてしまう前に、せめて東ドイツを巻き込んで、ドイツ全体を中立化させてしまおう。そう彼は考えたのである。⁶⁸

他方、一九五七年にケナンが望みを託したのも、当時喧伝されていた「巻き返し」でもない「外交の常道」であった。相互の意図の「微妙な探り合いと話し合い」による複雑で柔軟な国際問題の調整だった。ベルリンの状態を安定させ、東欧諸国の人びとの〈自立〉への願望を消滅させないためには、ソ連軍を東欧から撤収させない

ればならない。そして、ソ連軍を東欧から撤退させるためには、少なくとも西側の軍隊が西ドイツから撤収しなければならぬ。さらに、統一されたドイツがNATOに加盟しないことと、西欧諸国が核兵器を保有しないことをソ連に保証しなければならぬ。こうした妥協を覚悟しながらソ連に外交交渉を呼びかけてみるしかない、とケナンは考えた。そして彼の見るところ、当時ソ連側から出されていた声明の多くは、西側が西ドイツにおける核兵器の配備を断念するなら、何らかの兵力引き離しの協定に達する用意があることをほのめかしていたのである。⁶⁹

c. アジアの権力闘争

それでは、リアリストたちは、同時代のアジアをどう見ていたのだろうか。「ヨーロッパにおいては、われわれはロシア帝国主義に直面しているが、アジアにおいては、純粹な意味での革命に直面している」。一九五一年にモーゲンソーは、こう喝破している。ヨーロッパにおける脅威は主としてソ連軍の存在自体であり、それは軍事的なものである。しかし、アジアには軍事的脅威は、ほとんど存在しない。

そればかりではない。そこで起きている革命の多くは、社会主義を大義に掲げてはいるものの、ロシア帝国主義の副産物というよりも、主として民族自決権と社会的正義が実現されないことに対して「長い間くすぶり、また広がっていた民衆の不満」のなかで醸成されたものである。中国をはじめとする社会主義国は、東欧諸国のようなソ連の「衛星国」ではない。つまり、モーゲンソーの見るところ、アジアには元来、「安全」の問題も「自立」の問題もほとんど存在していなかったのである。

こうした状況認識をもとに、モーゲンソーは、アメリカのアジア政策を俎上に載せた。アメリカは、ヨーロッパに

おける権力闘争とアジアにおけるそれをほとんど同一視してきた。そして、この判断の誤りこそがアジアにおける権力闘争を必要以上に激化させてきたと主張したのである。アメリカは主として「国内的な政治的考慮」から中国に対して反革命的な政策をとり、それによってアジアにおける勢力均衡を崩してしまった。そのうえ、さらに悪いことに、朝鮮戦争という「不必要な戦争」に従事し、アジアにおける脅威が軍事的なものであると確信するに至った。こうしてアメリカは、日本国民に不人気な再軍備を要求することになった。そして、フランスがインドシナから撤退した一九五四年には、オーストラリア、フランス、イギリス、ニュージーランド、パキスタン、フィリピン、タイをメンバーとする反共軍事同盟である東南アジア条約機構（SEATO）を結成するにいたったのである。

モーゲンソーの見るところによれば、アメリカのアジアにおける権力闘争は何よりも「人心掌握の戦い」であった。問題は、アジアに革命が起こりつづけるかどうかではなく、それに関わりなくアジアを味方に引き入れられるかどうかだった。共産主義の浸透そのものよりも、アジア諸国がロシアや中国の従僕になるのを防げるかどうかだった。

こうした認識のもとに、モーゲンソーは、民主主義の大義を振り回すことを止め、「他国の人民が欲しているものは何か」「現地の人びとの生活体験を反映する政治的イデオロギーは何か」を具体的かつ客観的に理解することを提唱する。「西帝国主義からの解放」と「経済的な向上」を望んだアジアの大半では民主主義が優先されなかったという事実を率直に認め、「同じ道徳的原理または政治的な概念でも、異なった環境においては異なった意味をもってくる」とを理解するよう呼びかけた。つまり、「特定の時、特定の場所に現われる種々の変転きわまらない心理的・政治的諸条件」を考慮に入れて政策を立案し、遂行していかねばならないと説いたのである。⁷⁰

d. 継続のなかの変化

以上のように概観してみるだけでも、リアリストたちが権力闘争を個別的に理解しようとしていたことは十分に理解されよう。彼らは権力闘争が「時と場所を超えた普遍性」をもつことを強調しながらも、他方でその時間的・空間的な個別性を理解することに重きを置いていた。権力闘争を国際政治のエッセンスとみなしながらも、それが展開される状況の多様性とそこで進行する変化を懸命に理解しようとしていたのである。

もちろん、その「現実」認識は、つねに正しかったわけではなからう。上述の例だけを取っても、冷戦を歴史として俯瞰できる現在から見れば（とくに当時のヨーロッパの状況については）疑問点は少なくない。モーゲンソーが勢力圏画定交渉の提案をした一九五〇年代初頭のヨーロッパにおいて、すでに勢力圏の画定が米ソ間の交渉なしに進行していたという事実を見出すのは困難ではなからう。⁷¹ また、ケナンが提案した「兵力引き離し」交渉については、それが「勢力圏の尊重」と「勢力圏の配置の維持」という、当時形成されつつあった冷戦時の主要な行動規範を脅かすものだったと見ることさえ可能である。⁷²

たしかに外交交渉は、「関係諸国の両立不可能に見える死活的利益を両立可能にさせるべく再定義する」⁷³ための主要な手段だが、それが権力闘争を緩和しようとする際に常に適切な方法だとはかぎらない。外交交渉の黄金期ともいえる「古典外交の時代」とは異なり、二十世紀後半の外交は、すでに大衆国家の出現によって「貴族性」を失っていたし、相手の政治経済体制の正当性さえ認めない二つの超大国の登場によって、その役割は大きく限定されていた（それはリアリストたち自身が強調していたことでもある）。また、実際には「勢力圏画定交渉」も「兵力引き離し」交渉も実現しなかったが、にもかかわらず、結局、ヨーロッパにおける東西間の軍事衝突は起こらなかったという歴史的

事実も重んじられなければならない。

しかし他方で、モーゲンソーやケナンが世界政治の根本的現実を権力闘争の激しさと性質の「絶えざる変化」に見たことは忘れてはなるまい。繰り返しになるが、ナイが構築した理念型は、リアリズムを国際政治の継続的側面に焦点を当てるアプローチだとみなしている。なるほどリベリズムの理念型との対比で使用されるかぎり、これ自体は誤りではなからう。しかし、リアリストたちが重視したのは、実際には単なる継続ではなく、いわば「継続のなかの変化」であった。現実の静態的な側面よりもむしろ動態的な側面だった。

彼らにとって肝要なのは、権力闘争が常態であることを率直に認めたくえて、過去と未来を視野に入れながら変わりゆく、「現実」を理解することだった。とくに、「表面的な現在の権力関係から将来における（権力関係）の発展を見抜く」ことだった。⁷⁴そして、そうしたうえで権力闘争を過度に激化させず、緩和させる方策を見つけ出すことだった。困難で地域ごとに多様な「現実」に粘り強く働きかけて、それが過度に軍事化することを避け、外交交渉という政治的な「わざ」の余地をできるだけ広く残していくことであった。

すでに述べたように、ソ連は一九四九年に核実験に、五七年には大陸間弾道弾（ICBM）の発射実験に成功した。この間、アジアでは五〇年に朝鮮戦争が勃発し、五四年にはSEATOが結成された。こうした事件とともに人びとは軍事的問題に心を奪われるようになっていた。だからこそ、リアリストたちは、外交交渉の重要性を敢えて強調したのである。

あるいは、モーゲンソーやケナンは、ドイツの統一を急ぎすぎていたのかもしれない。ヨーロッパが直面する危険、核戦争の可能性という危険を過大視していたのかもしれない。しかし、先に見たように、第一に、彼らは国際制度が

崩壊した時代に生きているという認識に立ち、現代における国家間の権力闘争を可測性の少ない不確定性に満ちたものとして捉えていた。第二に、「現実」を絶えず変化するものとみなしていた。そして第三に、国家間の権力闘争が過度に軍事化されてしまうことを恐れていた。こうして、着実に柔軟で政治的な手段に期待したのであり、それが外交交渉だったのである。

ケナンが残した有名な言葉を借りれば、彼らは、「世界問題へのアプローチにおいて：機械工ではなく庭師」になろうと努めていた。⁷⁵ リアリストたちは、将来に目を据えて、彼らなりのやり方で早くから懸命に〈安全〉と〈自立〉の種を蒔き、それを大切に育てようとしていた。これもまた忘れてはならない事実なのである。

(注)

⁵⁶ Morgenthau, *Politics Among Nations*, pp. 16-17. 邦訳、前掲書、三六ページ。

⁵⁷ *Ibid.*, p. 267. 邦訳、同上書、三五〇ページ。

⁵⁸ 以下の記述については、とくに、*Ibid.*, Part Four. 邦訳、前掲書、第四部、永井陽之助「アジアにおける『力の均衡』」、『多極世界の構造』(中公叢書、一九七三年)、所収、高坂正堯「古典外交の成熟と崩壊」Ⅰ・Ⅱ(中公クラシックス、二〇一二年)、Hedley Bull, *The Anarchical Society*, Chapter 5. 邦訳、前掲書、第五章、及び、Stanley Hoffmann, "Balance of Power," in David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Volume 1 (New York: The Macmillan Company & The Free Press, 1968), pp. 506-510 参照。なお、Richard Little, "The Balance of Power in *Politics Among Nations*," in Michael C. Williams, ed., *Realism Reconsidered: The Legacy of Hans J. Morgenthau in International Relations* (New York: Oxford University Press, 2007), pp. 137-165, 及び、細谷雄一「国際秩序——一八世紀ヨーロッパから二一世紀アジアへ」(中公新書、二〇一二年)、序章、第二章も参照。

⁵⁹ 高坂「古典外交の成熟と崩壊」Ⅰ、二〇四ページ。なお、中西寛「高坂国際政治学を凝縮した古典外交論の彫琢」、高坂、前掲書、所

収、一〇二〇ページも参照。

⁶⁰ 以上につづいては、'morgenthau' Morgenthau, *Politics Among Nations*, Chapter XIX, 邦訳、前掲書、第二章、及び、永井陽之助『冷戦の起源——戦後アジアの国際環境』I（中公クラシックス、二〇一三年）、一五三〜一五九ページ、参照。

⁶¹ Raymond Aron, *Le grand schisme* (Paris: Gallimard, 1948), Chapter 1.

⁶² たとえば、一九五一年にモーゲンソーは次のように述べている。「一つの国家がその国際的な目的を達成するには三つの方法がありうるであろう。戦争に訴えるか、敵を抑えるために圧倒的な力をもつようにするか、それとも交渉によって妥結に到達するか、である。アメリカ政府のスポークスマンは、ときとして第四の方法があると信じてきた。それは冷たい戦争である。これは、東西両世界のあいだに最少限の関係をたもち、平和が戦争かの問題を未決定のままバランスさせ、しかもそれをおそらく一世代も続かせるといったようなものである。この可能性は、およそ其の可能性としては全然ないといえる底のものである。たとえ合衆国とソ連が、戦争にならないかぎりにおいてのしかし公然たる敵対関係にある、という事態の重圧に何十年ものあいだ堪えられるだけの精神的・物理的な潜在力をもっているとしても、二つの要素が、冷たい戦争に早晩結末をつけることになるであろう。一つは、用心からでもあるが絶望すらでもあるところの、大量破壊兵器の強化から来る恐怖である。いま一つは、西独や東南アジアのような二つの世界のどちらからも決定的には支配されないで、はげしく抗争されている地域における極度の不安である。こうした地域では、両世界間の力関係に影響を与えるような、現状の根本的変化が、かならず起こってくるであろう。冷戦状態の下においては、ただ超人的な叡智と自制のみが、これらの地域に起こりそうな革命や内乱や国際戦争を安全に、局地内に留めることができるであろう。」Morgenthau, *In Defense of National Interest*, pp. 139-140, 邦訳、前掲書、一四〇〜一四一ページ。

⁶³ *Ibid.*, pp. 195-197, 邦訳、同上書、一九七〜一九九ページ、参照。

⁶⁴ Kennan, *op. cit.*, p. 416, 邦訳、前掲書、三九〇ページ、参照。

⁶⁵ この点をケナンが立案したマーシャル・プランについて論じた先駆的業績として、佐藤信一「マーシャル・プランとジョージ・F・ケナンのヨーロッパ統合構想」、川端正久編『一九四〇年代の国際政治』（ミネルヴァ書房、一九八八年）、一〇六〜一二四ページ、参照。
⁶⁶ たとえば、一九四八年十一月にケナンが國務省政策企画部長として提出した「計画A」があげられよう。Kennan, *op. cit.*, pp. 423-448, 邦訳、前掲書、三九五〜四二〇ページ、参照。

⁶⁷ George F. Kennan, *Russia, the Atom and the West* (New York: Harper & Brothers, 1958), Chapter 3. 邦訳「長谷川才次訳『ロシア・原子・西方——リース卿記念講演』(時事新書 一九五八年)」、第三章。この講義については、Kennan, *Memoirs 1950-1963* (Boston: Little, Brown, 1972), Chapter 10. 邦訳「奥村検訳『ジョージ・F・ケナン回顧録——対ソ外交に生きて』」下(読売新聞社 一九七三年)「第十章も参照。なお、ケナンは『ヨーロッパにおける「東西兵力引き離し」の構想」を一九五九年に再論している。Kennan, "Disengagement Revised," *Foreign Affairs* (January 1959). 邦訳「湯浅義正訳「ふたたび『兵力引き離し』について」」「ヨーロッパの苦悩——東西兵力引き離しの構想」(岩波新書 一九五九年)」、所収。

⁶⁸ Morgenthau, *op. cit.*, pp. 161-189, 197-200. 邦訳「前掲書 一六二—一九〇ページ、一九九—二〇二参照。

⁶⁹ Kennan, *Russia, the Atom and the West*, Chapter 3. 邦訳「前掲書 第三章、参照。

⁷⁰ 以上については、Morgenthau, *op. cit.*, Chapter 7. 邦訳「前掲書 第七章、参照。なお、よく知られているように、ジョージ・ケナンは、国務省政策企画部長として、マーシャル・プランを立案し、実現させた後の一九四八年に日本を訪れ、アメリカの対日占領政策の軌道修正に大きな影響を与えた。介入による改革よりも「自立」を促すことを重視し、経済復興に力を入れて共産主義への抵抗力を強化し、文化交流を通じて親米感情を強めることを提言した。Kennan, *Memoirs 1925-1950*, Chapter 16. 邦訳「前掲書 第十六章、及び、細谷千博『サンフランシスコ講和への道』(中央公論社 一九八四年)」、第二章、参照。また、帰国後には、日本の安全を保障するには沖縄の米軍基地だけで十分だと説き、日本に中国・ソ連との関係改善を促して、将来的には日本の軍事的中立化をも視野に入れるべきだと主張した。Kennan, *Memoirs 1950-1963*, Chapter 3. 邦訳「前掲書 第三章、及び、Kennan, "Japanese Security and American Policy," *Foreign Affairs* (October 1964). 邦訳「日本の安全保障とアメリカの政策」、松本重治編訳『アメリカ外交の基本問題』岩波書店 一九六五年)」、所収。参照。なお、中西寛「アメリカの外交的知性——ジョージ・F・ケナンの先見性」『国際交流』一〇〇号(二〇〇三年)も参照。後に、モーゲンソーもケナンも早い時期からベトナム戦争を批判することになる。この点については、たとえば、Morgenthau, *Vietnam and the United States* (Washington, D. C.: Public Affairs Press, 1965), 及び「The Statement and Testimony of former Ambassador George F. Kennan," in *The Vietnam Hearings: The Complete Statements of Dean Rusk, James M. Gavin, George F. Kennan, Maxwell D. Taylor with Extensive Excerpts from Their Testimony* (New York: Random House, 1966), pp. 107-166. 邦訳「ケナン証言と討論」『アメリカ研究所編訳『世紀の大論戦——アメリカ上院外交委員会ベトナム問題公聴会議事録』(三一書房 一九六六年)」、二四九—三一九ページ、参照。

⁷¹ 当時アメリカはすでに西ドイツ再軍備の検討を進めていたし、(実現しなかったとはいえ) 占領支配の終了とともに西ドイツを西欧諸国が構成する欧州防衛共同体 (EDC) に加盟させるという案も出されていた。たしかにスターリンは「非同盟の統一ドイツ」を作るという提案を一九五二年に行なおうとしていたが、西ドイツがこれに応じる可能性は、ほとんどなかった。この点については、たとえば、John Lewis Gaddis, *We Now Know: Rethinking Cold War History* (New York: Oxford University Press, 1997), Chapter 5, 邦訳、赤木完爾・齊藤祐介訳「歴史としての冷戦——力と平和の追求」慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、第五章、参照。

⁷² 冷戦史家のジョン・ギャデイスが論じているように、四十年以上にもわたって大国間の熱戦がなかった冷戦期は、歴史上例外的な「長い平和」だったともみなされる。そしてその基盤になったのは、米ソ間のせめぎ合いの中で自然発生的に作られた暗黙の行動規範であり、そうした「制度」の屋台骨になったのが「勢力圏の尊重」と「勢力圏の配置の維持」であった。ユーゴスラヴィアやキューバの例のように、米ソいずれかの勢力圏からある国家が離脱しようときに他方がそれにつけこんだのは、「アメリカあるいはソ連が離脱をくい止められないときか、その気がないときだけ」だった。ケナンが「兵力引き離し」を提案する契機のひとつとなった一九五六年のハンガリー暴動の際は、ソ連側にそれを見過ぐす意思はなかった。それゆえにアメリカにできることはほとんど何もなかったし、それがヨーロッパの分断が決定的になったことを西側諸国に認識させるとともに、「勢力圏の尊重」というルールを確認させた。さらに重要なことに、米ソ両国は、せめぎ合いのなかで「予測不可能な合理性よりも予測可能な異常さを選ぶ」(勢力圏の配置を合理的に変更して不測の事態を招くよりも変則的な配置を維持して予見しやすい現状を好む)という暗黙のルールを確立した。John Lewis Gaddis, "The Long Peace: The Elements of Stability in the Postwar International System," in *The Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War* (New York: Oxford University Press, 1987), Chapter 8, 邦訳、宮坂直史訳「長い平和——戦後国際システムにおける安定要素」五味俊樹他訳「ロング・ピース——冷戦史の証言「核・緊張・平和」(芦書房、二〇〇二年)、第八章、参照。たしかに、ケナンが懸念したように、ドイツの分割は不自然だった。それは場当たり的な一時しのぎの対応が積み重ねられたものであり、その長期的なコストを計算した合理的で計画的な設計の帰結ではなかった。しかし、ケナンの「兵力引き離し」案に対して当時レイモン・アロンが述べていたように、「情勢そのものは一目瞭然としており、誰しもがどこに境界線があるかを知っており、また次に何が起こるかを心から不安に思っている人もいなく」かつた。つまり、「ヨーロッパの明白な分割は、よかれ悪しかれ、他のいかなる取り決めよりも危険が少ない」と考えることもできたのである。Raymond Aron, "Response à George Kennan," *Occident*, 10 (1958), pp. 13-17, 邦訳「時代遅れなケナン説」『世界週報』一九五八年四

月二八日号、一六〇二三ページ。なお、ケナンやモーゲンソーに対するアロンの批判の全体像については、拙論「レイモン・アロンの『リアリズム』批判」『法政研究』第九巻四号(二〇〇五年二月)、六一―一二〇ページも参照。

⁷³ Morgenthau, "Diplomacy," in *Politics in the Twentieth Century*, Vol. III, p. 203.

⁷⁴ Morgenthau, *Politics Among Nations*, p. 116. 邦訳、前掲書、一七〇ページ。

⁷⁵ Kennan, *Realities of American Foreign Policy* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1954), p. 93.

おわりに

本稿では、国際関係論の研究において、最も重要であり、かつ、最もわかりにくい概念のひとつであるリアリズムを取り上げ、その本質が何かを論じてきた。とくに、最も広く使用されていると思われる、ジョセフ・ナイが構築したリアリズムの理念型に光りを当て、それをリアリストたちの思想と比較吟味した。(一) 国際関係の主体は国家である、(二) その主要な目的は安全保障である、(三) それが使用する主な手段は軍事力である、というナイが提示したリアリズムの理念型は、彼自身が主張するように、国際関係における変化と継続を把握するうえでは確かに有用な「分析の道具」である。それを本稿も否定するものではない。

しかし、言うまでもなく、この理念型は特定の目的のために作られたリアリズムの純粹型のひとつであり、実在した思想としてのリアリズムではない。理念型の必要性を説いたヴェーバー自身が述べているように、それは「一つの、または幾つかの、観点をそれだけ強く一面的に高めることによって、そしてこの一面的に強調された観点到に適應する個

別現象、すなわち、それらはここには多く、かしこは少なく、所によつては全然ないというようにしてばらばらに存在する夥しい個別現象を「思惟上で」結合して、それ自身のうちに「論理上矛盾なく」統一された一つの思惟像に作り上げることによつて獲得される」ものであり、「現実のうちにはどこにも：見いだすことはできない」ものである。それは、「純論理的な」「完全性」以外にはいかなるものにも係わりをもたない」概念であり、評価的な価値判断を排した「客観的な」認識のための道具である。⁷⁶つまり、国際関係の多様な諸側面を理解しようとするならば、われわれは、リアリズムを理念型としてのみならず、思想としても理解し、絶えず相互に比較対照していかなければならないのである。

それは、ナイの師でもあるスタンレー・ホフマンが、かつて「分析のレベル」について遂行した作業に似たものとなる。一九五九年に上梓された『人間・国家・戦争』で、ケネス・ウォルツは、ホッブズらを人間性に戦争の主因を求める「第一レベル」の論者と、カントらを国内構造にそれを求める「第二イメージ」の論者と、そしてルソーらを国際環境にそれを求める「第三イメージ」の論者とみなした。⁷⁷これ以降、個人、国内、国際システムの三つの分析レベルは、戦争をはじめとするさまざまな国際的事件の原因を分析する際に当然のように使用されるようになり、ナイのテキストでも、最も重要な分析の道具のひとつとして活用されている。

もちろん、ホフマンもこの著書を高く評価し、「もし孤島の隠遁者に国際関係論の本を三冊与えよと頼まれれば、『トウキョウディデスの『歴史』とレイモン・アロンの『平和と戦争』⁷⁸とともに、ウォルツの『人間・国家・戦争』を手渡すだろうと述べているほどである。⁷⁹

しかし他方で、ホフマンは、この著書が「国際競争の三つの『イメージ』を分類することによつて世界政治の理解

を促してきた」ものの、「彼が扱った思想家の幾人か——とくにホッブズとルソーとカント——を理解するのに同じくらい寄与してきたかどうかは定かではない」と警告している。⁸⁰そして、個々の思想家が、一つの「イメージ」に還元できるほど単純な考えの持ち主ではなかったことを、実際に証明して見せているのである。

ホフマンの論考には遠く及ばないとはいえ、本稿も、リアリズムについて、これと類似した考察を試みたものである。その結論は、以下になる。第一に、客観的な認識を目指すナイの理念型とは対照的に、実在したリアリストたちの最大の関心は実践的なもの、すなわち平和の達成であった。彼らはそれを指針とし、利用可能な手段と実現可能な具体的目的を見定めるために「現実」を把握しようとした。第二に、彼らは力の観点から国際政治の見取り図を描いた。権力政治を除去しようとする誤りを指摘し、それと緩和させていく「制度」としての勢力均衡の重要性を説いた。第三に、リアリストたちは、現実の継続的側面というよりもむしろ「継続のなかの変化」を強調した。権力闘争の普遍性を説きながらも、その時間的・空間的な個別性を強調し、不確実性に満ちた世界において、それがどう展開していくかを見極めようとした。

もちろん、こうした努力を重ねていくなかで、リアリストたちとて、迷いや悩みを経験しなかったわけではない。現実から乖離した理想主義的幻想を批判することは比較的容易であったが、実際に「現実」を理解することは困難を極める作業だった。リアリストたちは、権力闘争に国際政治のエッセンスを見出したが、その性質や程度を理解することは決して容易ではなかった。彼らは、一般理論の構築のみならず、政策提言にも果敢に取り組んだ。だが、卓越した才能とセンスをもつ彼らでさえ、常に自信に満ちていたわけではないし、常に正しい処方箋を書けたわけでもなかった。

「現実」はあまりにも多様であり、未来はあまりにも不確実である。そして約二五〇〇年前から「現実」に対峙してきたリアリズムもまた多様でありニュアンスに富んでいる。理念型として抽出されたリアリズムを理解し、分析の道具として使用することは、決してリアリズム理解の終着点ではない。理念型という近道だけを通じてリアリズムを理解することは、そもそも不可能だといっても過言ではないのである。

(注)

⁷⁶ マックス・ヴェーバー、祇園寺信彦・祇園寺則夫訳「社会科学のおよび社会政策的認識の『客観性』」、「社会科学の方法」(講談社学術文庫、一九九四年)、所収、一〇七―一〇八、一二八―一二九ページ。なお、この点については、拙論「Social Inquiry and Ideal Types」(歴史と未来)第三号(一九九七年)、一五八―一五〇ページも参照。

⁷⁷ Kenneth N. Waltz, *Man, the State and War: A Theoretical Analysis* (New York: Columbia University Press, 1959). 邦訳、渡邊昭夫・岡垣知子訳『人間・国家・戦争——国際政治の三つのイメージ』(勁草書房、二〇一三年)。

⁷⁸ Raymond Aron, *Peace and War: A Theory of International Relations* (New York: Doubleday, 1966).

⁷⁹ Hoffmann, "An American Social Science," p. 14. 邦訳、前掲書、一一一ページ、参照。

⁸⁰ Hoffmann, "Rousseau on War and Peace," p. 56. 邦訳、前掲書、一五〇ページ。